
魔法姉弟ツインクロノ

白いサンタクロース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法姉弟ツインクロノ

【Nコード】

N7276Y

【作者名】

白いサンタクロース

【あらすじ】

クロノ・ハラオウンは転生者である。

クレア・ハラオウンはTSしたクロノである。

それは、一人の神のミスから始まるストーリー

EP・1 転生しました（前書き）

以前試しに書いた物が、思った以上に好評でしたので、不定期ですが連載します

EP・1 転生しました

【転生】

二次創作では非常にポピュラーなジャンルである。

神のミスにより死亡してしまい、お詫びとして桁違いの力…チート能力を得て新たな命を持つ事だ。

そしてこの世界の神の有り得ないようなミスから物語は始まる。

彼によって死亡した人数は数億人。なにしろ、月を地球に落としてしまったのだ。

未曾有の大災害によって死亡した大量の人々は、神が一人づつ転生させた。同じ世界に何人も人間が転生し、それぞれが制限はあるものの、願い通りに転生した。

そう…【願い通り】に。

そしてこの物語の主人公である、【彼】が転生する順番になった。

「1111は…」

彼がいたのは光りかない空間。

何もない、先の見えない場所に。

「あの世なんだろうな」

「その通り！」

彼が振り向くと、いかにも神様のな人物が立っていた。
腰まで届く長い銀髪に髭。白装束に杖。
誰もが思い描くであろう老人が立っていた。

「えっと…」

「ワシは神じゃ。君はワシのミスで死なせてしまったの。すまん
な」

「ミスって…」

実際、彼は自分の死が神のミスによるものだとは信じられなかった。
自分以外にも大勢の人々が亡くなっているのだから。

しかし神の口から信じ難い事実が語られる。

「間違つて月落としてしまったのじゃよ」

「ハア！？」

なんてことを仕出かすんだコイツ…

神の行いに、ただ啞然とするだけだった。

「という訳で、お前さんを好きな世界に転生させてやろう。勿論色々特典付きでな」

「もしかして、二次創作であるアレですか？」

彼の頭に過ぎったのは【チート転生】という言葉。

「正解。ただ、本来のとは少しばかり違う世界じゃ。違うといっても、一部の登場人物の性別や年齢が違ったり、容姿が少し違う位と、物語に大きな変化を起こさない程度じゃがな」

所謂パラレルワールドの世界。

「ただし特典には制限がある」

「あるんですか？」

「同じ世界に転生させる人間が多いからのう。そのせいで問題が発生する可能性があるからな」

神の言葉からして、転生者は多数存在しているようだ。死者は多いのだ。当然と言えば当然である。

「まず一つ。意図的に原作の登場人物の親族にはなれない」

「意図的に…って事は、偶然は有り得ると？」

「うむ。生まれる場所位なら選択させてやれるからのう。運が良ければ…な」

この制限が無ければ、原作そのものが崩壊する恐れがある。

例として【インフィニット・ストラトス】の世界で考えてみよう。

この世界では、男性が原作に介入するのは非常に困難だ。いや、ほぼ不可能と言っても過言ではない。

織斑家が篠ノ之家に生まれない限り。

だからこそ、こぞって両家に転生を希望する者が殺到し、その先は言わずとも解るだろう。

おそ松くんなんてレベルではなくなってしまうからだ。

「二つ目は、ニコポ、ナデポ等の精神操作、魅了能力は不可能じゃ」

「これも皆が使うからですね」

「その通り。例えお前達から見れば、ただのキャラクターかもしれん。だが彼らもお前と同じ命がある、魂がある一人の人間なのじゃ。四方八方から魅了をかけられては精神が崩壊しかねんなからな」

「僕は嫌いなんで、ちょっと嬉しいです。ん？じゃあ僕と同じって事は……」

「察しが良いな。お前の生きていた世界も、他の世界では物語の世界だったのだ」

「まじですかい……」

「どんな世界かは教えられんがの。とある一組の男女の恋愛話かもしれない、昔の戦国時代話かもしれない、逆に未来の話かもしれない」

つまり彼も、もしかしたら物語の登場人物だったかもしれない。逆に物語には登場しないような背景の一人だったかもしれないのだ。

「三つ目、知識や技術は不可能じゃ」

「自力で手に入れろって事ですか」

「自らの努力、経験で得てこそ意義があるからの」

神の言う事も、尤もである。技や知識は、その人の人生で得た掛け替えの無いモノだからだ。

「最後に死者を蘇らせる事はできない。死者を蘇らせた時点で、同じ者にはならぬからな。お前達転生者と同じく…の」

それは、彼も別の人間に生まれ変わる事を意味している。

「以上じゃな。あ、それと転生については、同じ転生者以外には話したり伝える事はできんから」

「はい…」

（つまり話したりできる人が転生者って事か）

そして神は杖を彼に突き付ける。

「では、転生するか？勿論拒否する事も可能じゃぞ」

彼は少し考え転生する事を選んだ。

「ではまず何処の世界にする？」

「えっと…魔法とかあったら嬉しいです」

「ならば【魔法少女リリカルなのは】はどうじゃ？お前さんも好き
なやつじゃろ。まあかなり人気があつて、転生者も多いがの」

生前の彼が好きな作品だ。
やはり人気なようである。

「……そうですね。お願いします」

「よろしい。さあ、お前の願いを言え。お前の望み通りの力、容姿、
年齢、場所に生まれさせてやろ。…そう、【願い通り】【間違い
なく】な」

その言葉に僅かに違和感を感じる。
特に最後の【願い通り】【間違いなく】の部分が。

（まさか…）

彼は感づいた。この神は本当に願いを叶えるだろう。だがそれだけ
だと。

正確には【願ひしか叶えない】のではと。

「男性で、StrikerSの時点で成人になっている年代の管理
世界に生まれる事、魔法の才能、良い家系、悪くない容姿、でお願い
します」

「……そんなんで良いのか？宝具とかEXランクとかいらんのか？」

大抵の者は圧倒的な力と、完璧ともいえる美貌を望むからだ。

「いりません。これが一番リスクがありませんし」

「…ふむ。どうやら感づいたようじゃの。お前さんは賢いのう」

神は彼の心を読んだ。

「やっぱり…」

「左様。ワシは願い通りにしか叶えん」

要約すると、ドラエモンの四次元ポケットを望んだ場合、ポケットだけしか貰えないのだ。道具が一つも無いただの入れ物でしかない。オッドアイで生まれれば、疾患を持って生まれる可能性すらある。

「どうしてこんな事を？」

「何。ただ欲望にまみれた者、考えの浅はかな者にはロクな事はできんからの。まあお前さんと同じく、ワシの意図に気付いた者も少なくないがな」

「つまり気付かない人の方が多いと」

「そうじゃ。言っておくが、お前さんの望みもかなり運任せじゃぞ。願ったからにはもう変えられんがな」

魔法の才能も平均以上からなのとは同等、それ以上とかなり幅広い。生まれる家も同じだ。

「わかってますよ」

「よろしい。因みに原作知識と自分の能力は、絶対に忘れんからな」
つまり彼は能力と同じく、リリカルなのはについては一切記憶から消えないのだ。

「では、第二の人生を楽しむが良い」

「さようなら」

彼は光りに包まれ、その場から消えた。

「さて、次は……何？銀髪オッドアイ、ニコポ、ナデポ、魔力無限、無限の剣製？ニコポ、ナデポ以外は可能じゃぞ……生まれてすぐ死ぬかもしれないがの（ボソ）」

ここはミッドチルダのとある病院。

その産婦人科の病室に一人の男性と幼い少女が入って来た。

彼の名はクライド・ハラウン。その手に引かれる幼い少女は、二年前生まれれた彼の娘、クレア。

二人が入った病室には、緑の髪をした女性がベットに横たわっている。

彼女はクライドの妻、リンディ。

「男の子ですって」

リンディは隣に眠る生まれたばかりの息子に視線を送る。

「ああ。ほら、クレア。弟だぞ」

「……ん」

クライドはクレアを抱え覗き込む。

新たに生まれた命。己の息子と対面する。

少女は初めて見る弟という存在に困惑する。なにしろまだ二歳なのだ。無理もない。

だが、これだけは理解していた。この子は自分が守るべき存在だと。

「ねえ。名前はやっぱり…」

「クレアの時に考えておいた、男の子の名前だな」

「ええ。フフッ」

二人は揃って息子の頬を撫で、その名を口にする。

「「クロノ」」

そしてその翌年、クライド・ハラオウンは、二十五歳という短い生涯を終える。

二人の子供と妻を残し、いくつもの悲劇を生み出した、深い闇に飲み込まれた自らの艦と、運命を共にしたのだった。

EP・i 転生しました（後書き）

基本的に三人称視点です

EP・2 生まれた世界（前書き）

続けて行きます

近い内、無印の前に設定を書きます

EP・2 生まれた世界

クロノ・ハラウン。

彼は転生者である。

ただ、原作のクロノに憑依したのではない。本来のクロノは、彼の姉であるクレアだ。この世界は、クロノの性別が逆な世界なのである。

自分は、クロノの名を与えられただけの別人だと。

その事を確信したのが、クロノが三歳の時。クレアが士官学校に入学、さらにグレアム提督の使い魔に弟子入りし、魔導師として訓練を始めたのがきっかけだ。

意識がはつきりした以前から、妙だと思っていた。自分の魔力資質が高いのは神によるものとしても、父、クライドが自分が生まれてから一年で死亡した事、姉の年齢が二つ上だという事。

そう、この世界の原作と違う部分を理解した。

その年は主人公であるなのは生まれた年だ。この一年間、ミッド等の管理世界で大量の赤ん坊が出生後死亡したり、脳や身体に重大な障害を持って生まれる事態が続発した。

勿論転生者達である。

なのはの運動が苦手という事に魔力が原因といった説があが、それが正しいと考えると、なのは以上の魔力を生まれながらに保有しているのだ。無事でいられるはずがない。

無闇矢鱈に力を求めた結果、人間に扱える力でなくなり、その身を滅ぼしたのだ。

勿論地球の海鳴でも、同じ事が起きている。
管理局は把握していないようだが…

「お母さん。僕も魔法の勉強がしたい」

さらに二年後。クロノは、母リンディに、自分も魔法を学びたいと伝えた。

当初クロノは、魔法を学ぶ事を恐れた。他の転生者達である。KYと嫌われ者である彼と同じ名前、容姿を持って生まれた彼は、四歳の時やはり転生者に襲われた。自分より二つも年上の少年に。彼が望んだのはカブトゼクターで、ゼクターに認められてなく、クレアが助けに入った為、命に別状は無かった。そしてこれが、クレアにとって初めて人間を魔法で攻撃した事である。

見ず知らずの年上の少年にいきなり殴られるなんて、四歳の子供がらしたらトラウマものの事件だ。しかしクロノも転生者。自分が襲われる理由も、彼が言っていた意味も理解できている。

これからはもっと大勢の人に襲われる。それから逃れるには、名前

を変えたり、余所の家に養子になるなりして自らの存在を隠すしかない。

だが、クロノは戦う事を選択した。

彼が【リリカルなのは】と出会ったのは、二次創作からだった。

読んだ物全てではないが、大半の作品でクロノが【神聖な少女達の誇りを賭けた戦いを邪魔した愚か者】【自分の思い通りにしないとわめく子供】と散々な扱いを受けていた。

しかし、いざアニメを見てみるとどうだろうか？

彼は危険行為を止めに来ただけで何の非も無い。さらにフェイトの無罪の為に奔走し、その後の闇の書事件も、はやてやヴォルケンリッター達の為に動いたのだ。

自らも闇の書の遺族であるのに…

だからこそ、クロノは自分に与えられた名に恥じぬ生き方をすると身勝手な解釈や欲望に塗れた者に負けまいと。

クレアと同じく、リーゼ姉妹に弟子入りしてからというもの、クロノは目まぐるしくその能力を磨いていった。神に与えられたのはあくまで才能。それを力にできるかは己次第だからだ。

クロノは努力した。自分の身を守る為、家族を守る為、そしてこれから起こるであろう数々の事件と戦う為に。

姉のクレアも同じだ。

才能で劣るとはいえ、姉の意地、そして弟を守る為、【こんなはずじゃない人生】と戦う為、同じ思いをする人を一人でも多く救う為に。

二人の特訓は過酷だった。

姉妹との模擬戦は元より、無人世界でのサバイバル、戦術を組む為

の座学、魔力総量を上げる為の負荷訓練。何から何まで幼い姉弟には耐え難い事だった。
しかし二人はこなしていった。譲れない思いがある。勝たなければならぬ戦いがあるから。

ここは時空管理局、ギル・グレアムのオフィス。

「ふむ…」

「どうですか、父様」

「二人共優秀だよ」

その主である彼は、自らの使い魔達から渡された、ハラウン姉弟の特訓の報告を見ていた。

親しい間柄であり、部下であつたクライドの子供達。彼にとっては孫のようにも思える存在だ。

だからこそ自分が許せなかった。あの闇の書事件で死ぬのは自分であるべきだった。彼は死ぬべきでなかったと。

そして独自に闇の書を追い、封印方法を探った。それが半ば違法であらうとも。

そしてついに見つけた。封印方法を。後は闇の書を見つけるだけ。

グレアムの視線がクロノの報告に止まる。

「……素晴らしい」

クロノには氷結系の変換素質があり、さらに変換技術も高く、才能を伸ばし続けてると。

「確実に封印する為に、クロノの力が必要だな……」

「クロ助ねえ……」

「これからも二人を頼むぞ」

「「はい」」

二人が部屋から出て行く。

闇の書の永久凍結。クロノの協力があればより確実になる。

だが同時に罪悪感がよぎる。この行いは復讐に近い。そんな事を利用しようとしている自分がいる。

しかしクロノには親の敵討ちをする権利がある。ならばその機会を与えてやるべきではないか？

見苦しい自己弁護だが、これ以上犠牲者を出さない為には必要だ。そう自分に言い聞かせる。

強制はしない。ある意味命を奪うより残酷な事だから。

グレアムはデスクに置かれた地球儀に触れる。

（あと少し……地球に転生したのはわかったのだ。あとは主を突き止めるだけ）

地球儀を回転させると、一つの国が目止まる。

日本。

彼も何度か行った事のある国であり、十年程前から多くの局員が移住した世界。

勿論その局員は、転生者の親となる人々。確実に魔力とデバイスを得る為に、親が局員であると願ったのだ。

（…少し調べてみるか）

何か運命的なものを感じたグレアムは、日本の調査に乗り出した。そして半年後。八神はやてを見つけたのだった。

クレア・ハラオウンが九歳の時、史上最年少の執務官となった。

彼女は自宅のリビングで一つの資料を見ながら頭を悩ませていた。

「姉さん、どうしたの。溜め息なんかついて」

クロノが牛乳の入ったコップをクレアに渡す。

「ありがとう。ちょっとね…」

コップを受け取り、一口飲む。

「それ、何？」

「私の補佐官の立候補者リスト」

クロノが見ると、数人の少年少女の顔写真とプロフィールが書かれた資料だった。その程がレアスキル持ち。そして何処か見たような顔。

クレアが何者が気付いた転生者達である。

「周りからの評価も、スキルに頼ってるだけって連中でね。面接しても、なんか嫌な感じで…」

彼女の補佐官となり原作に介入する。そんな魂胆が丸見えな上、クレアに対し下心を持つ輩が多いのだ。
KYでも女性なら話しは別。そんな考えなのだろう。

「クロノ。私の補佐官にならない？」

「それも魅力的だけど、姉さんの下だと甘えちゃいそうだから遠慮しく」

「ええ〜お願い!」

手を合わせてクロノに頼み込む。

「…エドワードがいるじゃないか」

本名、エドワード・リミエッタ。この世界のエイミィである。当人の性別が変わっているのなら、将来結ばれる相手も変わっていて当然である。

「なんでエドが出てくるのよ!」

テーブルを叩き立ち上がる。

「優秀なんだろう? 良いじゃないか、仲良いんだし」

「う…。なんでそんなに嫌がるのよ…」

「嫌な訳じゃないよ。執務官に興味が無いだけ。とりあえず今は捜査官の資格を取って、色々と思おうんだ」

「…わかったわ。エドに頼む」

「そうしなよ」

実際、クロノは氷結といった、ロストロギアの封印に有効な手段を持っている為、特別捜査官になる事を薦められている。

(しかし、どうしよう…これ)

クロノは一枚のカードを取り出した。先日、グレアムからプレゼン

トされたデバイス。【ローラン】である。

「それ、提督からプレゼントされた杖でしょ？」

「うん」

「デザインはS2Uに似ているけど、中身は別物ね」

「氷結強化機構が組み込まれてるからね」

ローランはS2Uとよく似た形の杖だが、クロノの氷結系を強化し、より一層強力な魔法が高速で運用できる杖である。

デバイスとの相性も抜群。だがクロノには少しだけ嫌な予感がしていた。

これはデュランダルのプロトタイプなのではと。

その予感は的中しており、グレアムはこの杖を元にデーターを収集しデュランダルを作り上げ、クロノに託すつもりでいた。

「あんなにインテリジェントを欲しがってたのに……。やっぱり提督からのプレゼントからかしら？」

「それもあるけど、やっぱりストレージの方が軽いんだ」

「そうよね。処理速度がねえ……」

クロノも当初は、相棒たるデバイスに憧れた。だが、いざ使ってみては勝手が違った。

自分の命を預ける物だ。確実に自分に合った物の方が良い。

クロノは戸惑いつつも、ローランを自らの杖と決めたのだった。

第97管理外・地球。

この世界で大事件が起きた。クロノが八歳…なのはが五歳の時。高町士郎が重症を負った年である。

事件の内容はこうだ。

第97管理外・地球の日本、海鳴という町にて十数名の少年少女が戦闘し、多数の死傷者を出した。現場はギル・グレアム提督の指示の下、直ぐさま鎮圧された。

この事件の逮捕者の半分は、局員の子供であり、残りは現地住人だが、違法デバイスを所持している事がわかった。

要するに、なのはの気を引こうとした転生者達が、お互いに殺し合いを始めたのだ。局員の子供は親から貰った物を…そうでない者は拾う等、なんらかの手段でデバイス、能力をデバイスとした物を使い争った。

勿論グレアムが介入したのは、最近発見したはやてを隠蔽する為だ。

こうしてはやてを隠蔽し、事件は無事解決。事件に関わっていない、

多くの移住した局員までもが管理世界に戻り、現地住人でさえリンカーニアに封印処置が施され、武器を没収された。

物語は確実に近づいている。

介入者を間引きながら。

EP・2 生まれた世界（後書き）

多分次の次から無印かな？

EP・3 目前（前書き）

少し修正しました

原作介入までです

次回設定を書きます

EP・3 目前

原作が始まる日が刻々と近づいている。

ハラウン姉弟は順調に腕を磨いていった。

度重なる転生者との戦い。局員としての実戦。

クレアに至っては原作以上に力を付け、十四歳でありながらS-にまで成長した。クロノも負けじとAAAに合格し、特別捜査官としての資格を取った。本来のクロノには一步劣るが、それでも彼の能力は他の局員とは飛び抜けた実力を有していた。

そして転生者の襲撃といえば、ギル・グレアムにも起こった。はやてを封印しようとしたからである。

しかし今彼が亡くなれば非常に危険だ。はやての生活は彼に依存していたのだから。

彼の身に何かあれば、はやてへの支援が止まり、はやてが施設に入る可能性すらある。そうなってしまうえば、身体の悪い彼女は格好の獲物となり、イジメの対象になるだろう。それは心優しい彼女でさえ、確実に心を蝕み、力を手に入れたはやての行動を変え、最悪の事態を起こしかねない。

しかしそんな事は起こらず、彼は転生者達を返り討ちにし、尽く逮捕していったのだ。

彼の人物像をよく考え欲しい。グレアムは地球出身でありながら提督の地位に就き、【時空管理局歴戦の勇士】と呼ばれる程の人物なのだ。最低でもオーバースランクは確実である。

さらに彼の使い魔の存在もある。アルフの存在がフェイトの評価になつてるように、使い魔の性能が主の優秀さに繋がってるのだ。

彼女達はどうか？作中では、なのは、フェイト、クロノを手玉に取り、不意打ちとはいえヴォルケンリッターを闇の書に蒐集させ、全滅させたのだ。並大抵の実力ではない。

いくら神から力を与えられたとはいえ、そんな桁違いの实力を持つ人間に戦いを挑むのは、正直簡単では無い。例えるなら、強いキャラを使うチャンピオンに、最強キャラで挑む素人のようなもの。無謀である。

そしてここは地球。

ここにこの物語に深く関わる、二人の転生者がいた。

一人の名は神道刃。しんどうやいば

彼は生前読んだアンチ転生の創作物から、万が一の事を考え能力を得た。自分が最強になれるように…自分が主人公になる為に…

結果として刃の目論みは成功。海鳴に生まれ、士郎の件も転生者達の自滅のスキを狙いなのはと親しくなり、さらに私立聖祥大学付属小学校に入学した。そして、転生者同士の争いで少しずつだが腕を磨き、さらになのは、アリサ、すずかを上手く魅了し、原作にも介入し始めた。

しかし彼は一つだけミスをした。ユーノの扱いである。刃はユーノをぞんざいに扱い、接した。ユーノも自分が巻き込んだ負い目から

何も言わなかったが、それになのはが感づき出し、少しづつ刃に対する不信感を生み出していった。

もう一人の名はカレル・小川。

彼は原作には関わらず、ただ有意義な人生を送る事を望んだ。クロノと同じように才能を求めただけである。

たしかにカレルも、心の奥底には原作に介入したいといった気持ちはあった。だが数多くの転生者の存在が、カレルの介入する気持ちを失せさせた。

だが彼に転機が訪れる。

ジュエルシードを拾ったのだ。そこに他の転生者が現れ、ジュエルシードを渡すよう脅した。当然、転生者の目論みはフェイトに渡し、原作に介入する為である。

それだけでなく、その場にフェイトとアルフも現れた。転生者はカレルを悪役にしようとフェイトに言い寄ったが、その邪な感情に感づいたアルフに切り捨てられてしまった。

カレルはジュエルシードをフェイトに渡し立ち去ろうとしたが、転生者は逆上しカレルに襲い掛かった。しかしフェイトとアルフが助けに入り、撃退したのだ。その事がきっかけで、カレルは二人の頼みで現地強力者として、原作に介入する事になった。

そしてカレルは決意する。彼女達を先程のような転生者から守らなければならないと。物語を破壊する者と戦おうと。

カレルの予想は的中した。神道刃である。

刃の言動から、カレルは刃を最低な男と判断した。この少年が敵なのだ。

ユーノを盾にし道具のように扱う。自分に対し殺傷設定で攻撃してくる。

幸い、実戦経験と能力は劣るものの、母が元聖王教会所属の騎士で

あつた為、鍛えていたおかげで二度に渡る戦いを生き抜いた。

カレルは戦った。フェイトの代わりにジュエルシードを抑えた。助けに行けなかった、プレシアから虐待を受けるフェイトを支えようとした。少しでも物語を良い方向に向かわせようと。

何人もの転生者に出会った。中にはカレルを応援する者もいた。しかしカレルを邪魔者として排除しようとする者の方が多かった。彼は努力した。母に、フェイトに教えを請うた。強くなる為に。邪悪な者に打ち勝つ為に。

ここはアースラ。

「みんなどう？今回の旅は順調？」

アースラの艦長である緑の長髪の女性、リンディが乗組員に聞く。

「はい。現在第三船足にて航行中です」

「目標次元到達には、今から凡そ百六十ペクサ後に到達予定です」

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きはないようですが、二組の搜索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね」

「そう」

艦長席に座りながら思考を巡らせる。

小規模とはいえ震。次元リンディに僅かだが不安がよぎる。

「失礼します。リンディ艦長」

そこに一人の少年が紅茶を持ってきた。あほ毛が特徴な、中性的な少年。

彼はエドワード・リミエッタ。クレアの補佐官で、アースラのオペレーターである。

「ありがとう。エド」

リンディは紅茶を一口飲み呟いた。

「小規模とはいえ次元震の発生は…ちょっと厄介なものね」

小規模次元震は、昨夜のなのは、フェイトが衝突した事により起きた、ジュエルシードの暴走によって起こった物である。

「危なくなったら急いで現場に向かってもらわないと」

リンディはそう言って、黒いバリアジャケットの背中くらいの長髪の少女と銀色のバリアジャケットの少年に目を向ける。

「ね。クレア、クロノ」

「大丈夫。わかってますよ、艦長」

「僕達はその為にいるんですから」

二人は己のデバイスであるカードを握りしめた。

そしてついに介入の時。

「現地ではすでに戦闘が始まっている模様です」

「中心となっているロストログアのクラスはA+、動作不安定です
が無差別攻撃の特性をみせています」

乗組員が今の状況を話す。

モニターにはなのはとフェイト、そしてカレルと刃が映っていた。

その映像を見ながらクロノは僅かに顔をしかめる。

転生者の存在だ。

おそらく自分ま真つ先に攻撃される可能性が高い。だが逃げるなんて真似はしない。この名に賭けて。

「次元干渉型の禁忌物品、回収を急がないといけないわね」

リンディが報告を聞き、立ち上がりながら判断を下す。

「クレア・ハラOWN執務官、クロノ・ハラOWN特別捜査官、出られる？」

リンディがクロノとクレアに出撃出来るか尋ねる。

「転移座標の特定はできてます。命令があればいつでも」

「僕達にご命令を。艦長」

「それではクレア、クロノ、これより現地での戦闘行動の停止とロストロギアの回収、そして、関係者達からの事情聴取を」

「了解です！艦長！」

リンディは二人の返事に目を瞑り、頷く。

二人は転送ポートに向かった。

「どうしたのクロノ？なんか緊張していない？」

「ロストロギア関係だ。緊張するよ」

いや、正確には転生者絡みの方が強い。しかし、だからこそクロノは気合いを入れ直した。

自分は今まで何人もの転生者に出会った。

士官学校の頃は、自分を敵視し陥れようとした連中に何度も襲われた。逆に自分を助け、原作に介入しようと下心が見え見えな連中もいた。

だがそれだけでない。本当に自分の味方になってくれる転生者もいる。彼らには自分も転生者である事を伝えた。

皆はクロノを応援した。
頑張れ。負けるなと。

彼らはクロノの掛け替えの無い戦友となった。共に次元世界を守ろうと。邪悪な考えと欲望に塗れた転生者と戦おうと。

だからクロノは立ち上げれる。一人ではない。
背負うべきものが、守るべき人がいるのだから。

「行こう、姉さん」

「あ…うん」

クレアはその顔に父の面影を見出し、少しどぎまぎするが、直ぐさま自分も気持ちを入れ替える。

「気を付けてね」

振り向くとリンディが白いハンカチを振りながら言ってきた。
二人はリンディの行動に戸惑うような、呆れるような感じになりながら転移する。

「はい…行つてきます…」

「行つてきます」

そして二人はアースラから姿を消した。

現地ではハルバード型のアームドデバイスを持つカレルと、魔導書型と銃と刀が合体したようなデバイスを持つ刃が対峙している。

「運が良いな。今回はK Y討伐があるから見逃してやるよ」

「お前：本当に最低だな」

「黙れよホモ。オリ主の俺と戦えるだけ有り難く思えよ」

余りにも身勝手な言動をする、赤い長髪の美少年：刃を睨む。

この男はクロノを攻撃する。だが自分が残ればフェイトにも迷惑がかかる。だから信じるしかなかった。原作キャラの実力を。

対称的に刃は心の中で舌なめずりをした。

ついにこの時が来たと。クロノ・ハラウンを痛め付ける瞬間を。両親も管理局とは関わりが無いから、知らない事にして、存分に攻撃できる。そして痛め付けた後はリンディを言い負かし、なのはに格好良い所を見せ付けようと。

しかし彼は知らなかった。

自分が敵視する存在が、欲望の対称である美しい少女であると。その名を持つ者が自らの野望を打ち砕く、凍てつく剣である事を。

そして遂にその時が来た。

なのはとフェイトが飛び出した瞬間、水色の魔法陣から二つの人影が現れる。クロノとクレアが。

二人の魔導師、なのはにはクロノが。フェイトにはクレアが、それぞれデバイスを受け止める。

「ストップよ！」

「この場での戦闘は危険過ぎる！」

カレルと刃が驚いて目を見開く。自分の知る人物と違うからだ。

一人は銀色のバリアジャケットと杖を持つ少年。もう一人は黒いバリアジャケットと杖を持つ少女。

転生者か？それとも原作との相違点か？

混乱した二人を相手にせず、少女は威厳と正義感に満ちた声で名乗る。

「時空管理局執務官、クレア・ハラオウン」

少年は誇りと信念を持ち、その名を名乗る。

「同じく時空管理局特別捜査官、クロノ・ハラオウン」

クロノは今、職務だけでなく、醜い欲望を打ち砕く為にその場にいます。

「「詳しい事情を聞かせてもらおうか（かしら）！」」

クロノの本当の戦いが、今始まる。

EP・3 目前（後書き）

設定の次は戦闘です

設定（前書き）

修正しました

設定

クロノ・ハラウン

外見：原作クロノと同じ（無印時の身長も同じ）

年齢：無印で十二歳

魔力：S -（水色）

ランク：AAA、ミッド

バリアジャケット：原作クロノのものを銀色にし、肩のトゲや裾、手甲を黒にしたもの（ようするに色を逆転にしたもの）

趣味：魔法とお茶

好きなもの：家族

嫌いなもの：ヘイト系、最低系転生者、すっぱい食べ物

特技：お茶をつぐ事、気温を当てる事

苦手な事：料理（シャル以下）

この物語の主人公。魔法の才能と家柄、良い容姿を望み、ハラウン家長男として生まれる。

自分に与えられた【クロノ】の名に恥ぬよう、頑張る努力家。

度重なる転生者との襲撃やリーゼ姉妹の特訓により、かなりハイス

ペック。今でも鍛練は欠かさない。

全ての転生者を嫌ってる訳でなく、士官学校でも転生者の友人がいた。

氷結に関する能力が高く、その技能を認められロストログリア封印を得意とする特別捜査官の資格を取った（階級は二等空尉）。

原作については、やれるだけの事をやると決めている。

料理の腕前は、見た目は普通だが味が壊滅的である。

ローラン

外見：銀色のS2Uで、先端の円柱部分が六角柱になっている

待機形態：カード型

クロノの杖であるストレージデバイス。正体はデュランダルのプロトタイプで、デュランダルには劣るものの、氷結強化機構が組み込まれている。

声はデュランダルと同じ。

クレア・ハラオウン

外見：背中にかかる位の長い黒髪の少女、体格は幼い、身長もクロノと変わらない

年齢：無印で十四歳

魔力：原作クロノと同じ

ランク：S-、ミッド

バリアジャケット：原作クロノのものに、下半身をロングスカートにしたもの

趣味：仕事、ぬいぐるみ集め

好きなもの：家族、仕事

嫌いなもの：犯罪者、甘い食べ物

特技：覚えた事を忘れない

苦手な事：特に無し

この世界の本来の【クロノ】。

女性なので、原作より多少丸い性格をしている。ハイスペックな弟の存在や度重なる転生者との戦いで、原作以上に強い。

自分の体格を気にしており、よくマッサージなどをしている（リンディにはばれられ）。

因みに家事の腕前は普通。

若干ブラコン。

S2U

原作と同じ。

カレル・小川

外見：耳が隠れるくらいの水色の髪に青い瞳で中の上程度の顔、身長はフェイトと同じ位

年齢：無印で九歳

魔力：A A +（青緑色）近代ベルカ

ランク：無し

バリアジャケット：ダークグリーンに着物に紺色のマフラー、肩に銀色の金属鎧がついている（イメージはうたわれるもののベナウイ）

趣味：お笑い番組を見る事

好きなもの：運動、お笑い番組、辛い食べ物

嫌いなもの：ヘイト系、最低系転生者（特に刃）、粘り気のある食べ物（納豆など）

特技：身体が柔らかい

苦手な事：鈍感（自分以外にも）

才能、家を望んだ転生者。父は地球人だが、母が元聖王教会所属の騎士。

遠見市に住み、私立聖祥大学付属小学校に、バス通学をしている。
なのは達とは違うクラス。

真面目で熱血漢だが、暑苦しい部分もある。
偶然フェイトと関わるようになり、原作に介入する事になった。フ
ェイト、アルフとの仲も良く、物語を少しでも良くしようと思つて
る。

母親からの手ほどきで、地球の転生者では上位に入る実力を持つ。

ゼファー

外見：柄が緑のハルバード

待機形態：緑と銀の玉が順番に繋がった数珠のような腕輪

人格搭載型アームデバイス。柄の先端、斧や槍がつく所のすぐ下
に、グラーファイゼンと同じタイプのカートリッジシステムが搭載
されている。

声は若い男性。テンションが高く熱血馬鹿。

神道刃

外見：背中まである赤い長髪、紫の瞳をもつ桁違いの美少年、身長
はユーノより少し高い

年齢：無印で九歳

魔力：SS（虹色）

ランク：なし、古代ベルカ

バリアジャケット：胸元を開けた黒いコート（イメージはDMCのダンテ）

趣味：女の子と遊ぶ事（美少女のみ）

好きなもの：美人、自分

嫌いなもの：原作の男性キャラ、他の転生者全て、自分の思い通りにならない事、自分より優れている男

特技：ナンパ

苦手な事：すぐに興奮し周りが見えなくなる

最強の肉体、リンカーコア、海鳴に生まれる、女たらし、戦いの才能、最高の容姿、強運、自分の考えたロストログアクラスのデバイスの適合者になる事を望んだ転生者。自分こそ主人公と信じ、行動している。自分勝手にハーレムを狙っている。

幼少の頃からなのはと付き合いがあるが、高町家からは好ましく思われてない。

多少鍛えてはいるが、あくまで我流な上、実戦も素人である転生者だけなので、カレルと互角なのも能力のおかげ。全力のフェイトには劣る。ただしそれは現在の状態で、潜在能力は高いので鍛えれば強い。

新月の書

外見：赤黒いカバーに銀の逆十字架が描かれた魔導書

待機形態：銀の逆十字架のネックレス

刃のイメージを魔力で再現する能力を持ち、所謂【自分の知る漫画やアニメ全ての技、能力全部の使用】を疑似的に可能にしたデバイス。燃費も恐ろしく良く、使い方によつては、文字通りなんでもできる。刃にしか扱えず、刃が死亡した場合消滅する。

アカシックセイバー

外見：金と銀の大型で銃身の長い銃に下部から手の部分まで刃が伸びている（イメージは、デバイダー996の第二形態を簡略化したもの）

待機形態：新月の書の一部なので同じ

銃の中心にリボルバータイプのカートリッジが搭載されている。人格搭載型だが殆ど喋らず、時々刃を肯定するくらい。声は低い女性。

リンディ・ハラウン

原作と変わらず。

エドワード・リミエッタ

エイミィをそのまま男性化させたようなあほ毛の少年。
クレア、クロノとも仲が良く、よくクロノと二人掛かりでクレアを
からかう。

高町なのは

基本原作通り。刃に対して恋心を抱いていたが、最近不信に思っ
ている。

ユーノ・スクライア

刃の家に世話になってるが、扱いは悪い。ジュエルシードの件で、
自分にも非があると思いい耐えている。
今の所は、なのはに対しての恋愛感情は、少し気になる女の子程度。

フェイト・テストロッサ

カレルとの出会いて、原作より明るい。カレルに対しては今の所、友愛のみ。

アルフ

基本原作通り。カレルの事も信頼している。ただし刃は【臭い】らしい。

ギル・グレアム

闇の書封印にクロノの協力を求めようと考えてる事以外は原作通り。

リーゼ姉妹

原作通り。

八神はやて

幼い頃から転生者に言い寄られた結果、男性恐怖症になってしまった。人付き合いも苦手になっている。

クロノの使用魔法

ステインガーレイ / Stinger Ray .

原作と同じ。主に対人非殺傷攻撃に使用。

フロストキャノン / Frost Cannon .

ブレイズキャノンの氷結版。上手く使えば、敵を凍結停止させられ、最大出力なら封印にも使用できる。

アイシクルバレット / Icicle Bullet .

氷柱を撃つ射撃魔法。物理的な攻撃なので、対物攻撃として使用。

アイシクルブレイド / Icicle Blade .

ローランの先端から氷の剣を形成する。近接武装として使用。大き
さも変えられ、大型の薙刀としても使える。
勿論槍術は習得済。

ダイヤモンドダスト / Diamond Dust .

氷弾の拡散弾。連射はできず一発の威力は低いが、遠距離での弾膜
による牽制、零距离での破壊力は高い。

グラスコフィン / Glass Coffin .

エターナルコフィンの簡易縮小版。ローランで触れた相手を凍結さ
せる。

なお、この魔法はグレアムから直々に教わった。

ランページブリザード / Rampage Blizzard .

クロノの奥の手その一。自身の周囲を無差別に凍結させる空間攻撃
魔法。デアボリック・エミッシヨンの氷結版のような魔法。消耗が
激しく、二回使用はできない。

アイスドール/Ice Doll.

奥の手その二。自身に何かに触れた瞬間、その部分を凍結硬化させる防御魔法。発動中は魔力を消費し続け他の魔法の使用が難しくなる。攻撃能力は著しく低下する分防御力は高い。

EP・4 開戦（前書き）

先日、日刊ランキングにランクインしていました…

皆さんありがとうございます

EP・4 開戦

顔をマフラーで隠したハルバードを持つ少年、カレルは混乱した。ハラオウンと名乗る人物が二人現れた事に。

転生者が原作との相違点かはわからないが、アルフが攻撃するのに便乗して逃げる。おそらく刃もフェイトを逃がす為に行動するだろう。

そう思い、今はこの場から離脱する事にした。クロノに謝罪しながら。

絶世の美少年、刃も驚いた。クロノのバリアジャケットが違う。そしてもう一人のハラオウンに。

おそらく相違点なのだろう。あの少女も、自分のハーレムに追加される為に存在するオリキャラであると。

そう思いながアカシックセイバーを握り締めた。

「双方武器を収めて」

「その君達もだ。事情聴取に応じてもらう」

クロノとクレアは戦闘を中断するのを呼び掛ける。

「時空管理局？知らないな！」

先に行動を起こしたのは刃だ。

「魔法を使用して知らない？」

（やっぱりそう来たか）

クロノの予想通りだった。

知らなければ何をしても許される。そう簡単なものじゃないから。

「おそらく現地住人ね。偶然魔法と出会う。有り得くはないわ」

クレアは冷静に判断した。

実際、彼女達の師であるグレアムも偶然魔法と出会った。考えられる事である。

「とにかく、このまま戦闘行為を続けるな…っ！」

突如上空から魔力弾が降り注ぐ。アルフだ。

クレアの障壁で全員無事だが…

「フェイト、カレル！撤退するよ！離れて！」

さらに自分の周囲のファイアから魔力弾を発射する。

クロノはなのはを腋に抱えて飛び上がり回避する。

「クロノ、そっちは任せたわよ」

「了解」

同じく回避したクレアにフェイト達を任せ、自分はなのはに声を掛ける。

「君、大丈夫か!？」

「は、はい!大丈夫です」

抱き抱えられている状況に驚きつつも、なのはは落ち着いて答えた。

「このKY!なのははから離れろ!」

刃は銃口をクロノに向ける。

クロノがなのはに触れているのが気に入らないのだ。

「またKYか。僕の何処がKYなんだい?」

「決闘の邪魔をすんな!ジュエルシードを賭けた神聖な戦いを妨害するなんて、頭おかしいんじゃないか?」

クロノは呆れた。このまま戦い続け、ジュエルシードが暴走したらどうするつもりなのかと。

「決闘を神聖化するなんてナンセンスだ。それよりもこのまま戦い、暴走したらどうするつもりなんだい?」

「何度でも止めるさ!それに時空なんちゃらって、怪しい連中の言う事なんか聞か!」

（さあ、怒れ。それで攻撃してこい!そうすれば正当防衛も成立する!）

刃はクロノが攻撃するのを待ち、ひたすら挑発した。しかし当然ク

ロノはその事を読んでいる。それに、クレアも攻撃する訳がない。そんなに気の短く、考えの浅はかな人間に、執務官など勤まらないからだ。

「…まあここは管理外世界だ。管理局を知らない可能性も否定できない」

「管理外？ だつたら来るなよ！ 見ず知らずのよそ者がでかい顔すんじゃないねえ！」

（こいつ…典型的すぎる）

あまりにも予想通りすぎて笑ってしまいそうな位だ。刃の言う事は、ウル○ラマ○に地球から出て行けと言ってるようなものである。とにかくクロノは刃の暴言を受け流し続けた。戦わずにすむならそれにこした事はないからだ。

フェイトは原作通りジュエルシードに飛び掛かるが、クレアの魔力弾によって迎撃される。そして墜落したフェイトを受け止めたアルフに狙いを定めた。間に割り込むのははいない。

「させるか！」

『いよつしやあ！』

カレルが割り込みゼファーに魔力を込める。その魔力と展開された

ベルカ式の魔法陣に驚いた。

「斬空牙！」

ゼファアの斧が輝き、振るうと同時に斬撃波が放たれる。そして続けて、槍の部分を地面に突き刺す。

クレアは防御は危険と判断し、上空に回避。再度S2Uを向ける。

「爆裂剛波！」

突き刺さった場所に魔力を流し爆発を起こす。爆煙が巻き上がり、姿をくらました。

「煙幕！？」

無理に戦う必要は無い。捕まらなければ良いだけ。カレルもアルフに掴まり転移、離脱した。

「エド！」

『多重転移？ごめん、逃げられた！』

相棒の報告に顔をしかめるが、逃走を許してしまった自分のミスと判断し、すぐさま残りの一組…なのは達に視線を移した。

（畜生！どうしてこいつは冷静なんだ！）

刃は焦っている。目の前のクロノは一向に襲ってこない。何を言っても受け流してしまうのだ。
なのはも呆れ始めている。

「刃、落ち着いて。彼らは敵じゃないよ」

時空管理局を知るユーノは刃を止め出した。管理局と敵対する必要は無い。むしろ、味方になってくれるはずだから。

「うるせえ！てめえは黙ってる！」

ユーノを無視し、クロノを睨みつける。

（ユーノへの態度もアレか。ここまで欲望に忠実だと、いつそ清々しいな）

だが、あまり時間を掛けるのも得策ではない。

「君が僕達を信用できないのは重々承知している。だが今は話を聞かせてもらえないか？こちらに君達に危害を加える気は無い」

クロノは優しげに声を掛ける。事情聴取に応じてほしい。ただそれだけだから。

しかしその態度が、余計に刃を苛立たせる。しかし、このままだとクロノと戦えない。オリ主である自分がクロノを蹴る事ができないならばいつそ…

「黙れ！怪しい奴は立ち去れ！」

銃口に魔力を収束させる。

自分は管理局は知らない。だから攻撃して良いんだ。子供のような言い訳を考えながらその魔力を放つ。

「ゲシユタルトバスター！」

銃口から虹色に輝く大型の砲撃が放たれ、クロノに襲い掛かる。

（馬鹿！なのはもいるんだぞ！？）

当たればなのはを巻き込む。防ぎきれるかわからない。

クロノはジュエルシードから離れるように回避する。

「姉さん、こいつは僕がやる。姉さんはロストロギアを！」

「魔力に反応して、暴走するかもしれないし…うん、任せたわ」

クレアはジュエルシードの確保に向かった。

あの少年はクロノ一人で十分だろう。あの少年は、今まで戦って来た連中に似ている。力に頼りきった連中と。

「なにをしているんだ刃！なのはを巻き込む所だったじゃないか！」

「あいつがなのはを盾にしてんだよ！卑怯者め！」

刃は焦りによって周りが見えていない。とにかく自分を正当化させる事に必死だった。

「ちっ…」

クロノは顔をしかめる。彼は自分を狙う。だがこのままだとなのは巻き込む。

（仕方ない）

「君、飛べる？」

「はい」

「すぐに離れて。そのフェレットと一緒に」

「わ、わかりました」

クロノはなのはを放し、直ぐさま彼女から離れる。なのはもユーノを連れて離れた。そしてなのは達の前にクレアが盾になるように立つ。

「彼、あなた達の友達？」

「はい……」

「あまり言いたくないけど……付き合い方、考え直した方が良いわよ」

「……………」

（刃君、私がいるのに撃ったよね。わざと？それとも気付かなかっただけ？）

なのはは困惑している。

彼は優しくかった。自分にも、友人達にも。だが、最近の彼はおかし

い。ユーノへの態度は冷たいし、先程の少年への言動もだ。その疑心は少しずつ少女の中で大きくなっていった。

「なのは、大丈夫？」

「大丈夫だよ。ありがとう」

なのははユーノに小さく微笑んだ。

「さて…公務執行妨害で、少し拘束させてもらっ」

「権力の犬め！平伏が良い！」

『Pendulum Shooting』

銃口から十本のレーザーが広がるように放たれる。そしてクロノを囲むように、四方八方から襲い掛かってきた。

「この軌道…誘導弾か」

素早く分析し、高度を上げる。予想通り追い掛けてきた。

「逃げてても無駄だ！」

刃は追撃するように飛翔しクロノを追い掛ける。

クロノの後方には、魔力のレーザー…ペンダラムシューティングとその後ろに刃がいる。

（レーザーで防御を崩して本体で攻撃…って訳か。なら！）

クロノは停止しローランを構える。

そしてレーザーが命中する瞬間、下に落ちるように避けた。

「何！？」

レーザーはクロノがいた場所で衝突し合い爆散。追撃で振り下ろしたアカシックセイバーも空振りする。

「凍える！」

『Frost Cannon』

ローランの先端から冷気の砲撃が放たれる。

「防げ！」

『Accelerator』

新月の魔導書が開かれ、頁が一枚破れ刃の前にバリアが展開される。そのバリアはフロストキャノンが命中するとそれを反射した。

「っ！」

直ぐさまシールドを張り防ぐ。そしてシールドは凍り付き崩れた。

（反射か。面倒なモノを…）

心の中で舌打ちするが、直ぐに体制を立て直す。
アカシックセイバーを振り上げた刃が迫っているからだ。

「そら！」

「させるか！」

『I c i c l e B l a d e .
』

ローランの先端が凍り付き、そこから氷の剣が伸びる。アイシクルブレイドで受け止める。刃は続けて切り付けるが二度、三度と受け流し、弾き飛ばした。

「なんなんだよお前は！」

原作と違う魔法。こんな魔法はクロノは使わないはずだから。

「最初に名乗ったはずだ。クロノ・ハラオウンだ！」

自らの名を叫び、薙刀の形になった杖を構える。

（まさか転生者？いや、落ち着け…）

原作キャラと同じ名前：有り得ない。だが自分のやる事は変わらない。なのはに自分の強さを見せ付けるだけだ。

「調子に乗るなKY！」

刀身に魔力を追加し切り掛かる。その刃は受け止めようとした氷の剣を切り裂いた。

（破壊力は上か。だが…！）

大振りの攻撃はスキが大きい。振り下ろされたアカシックセイバーの銃身を踏み回し蹴りを繰り出す。

「げふ！？」

勢いよく頭を蹴られ、一瞬視界がブラックアウトする。よろけたスキに地面に蹴り飛ばした。

「こ…の…！」

「とどめだ！」

ふらつきながら立ち上がる刃を地面に押し倒し、馬乗りの状態でローランを鳩尾に押し付ける。

「頭を冷やしてろ！」

ローランが触れた部分を中心に刃の身体が凍り付いていく。

「ば…ま、待て！」

「凍てつけ！」

『Glass Coffin』

ついにデバイスもろとも全身が凍り付いた。
だがその姿は決して美しいものではなかった。敗北への落胆と怒りが入り混じった形相は、その美しい容姿をも歪めている。

「こ、凍っちゃった…」

「対人用の凍結魔法…」

二人共目を見開き驚いている。

自分達より圧倒的な魔力を持つ者が、いとも簡単に凍り付けにされたのだ。

「死んではいない。後で解凍してあげるから、安心してくれ」

クロノは杖を離したのは達に歩み寄る。

「「はい…」」

二人が頷いたと同時に、タイミングを見計らったかのようにモニターが現れる。そこに映っているのはクロノの母、リンディだ。

「二人共、お疲れ様」

「すみません…片方は逃がしてしまいました」

「僕も、戦闘になってしまいました」

モニターの向こうにいたリンディに謝る。

「んま、大丈夫よ。でね、ちょっと話を聞きたいから、そっちの子

達をアースラーに案内してあげてくれるかしら？」

「了解です。すぐに戻ります」

通信が切れ、モニターが消える。

「すまないけど、ちょっと来てもらえないかな？話を聞きたい」

「はあ……」

「わかりました……」

二人はクロノの言葉に頷きアースラへと転移するのだった。

EP・4 開戦（後書き）

お気に入り2000超え？いつの間に…

EP・5 アースラ（前書き）

低スペックの私の脳ではこれが限界でした…

私の考えを後書きにまとめました

EP・5 アースラ

ここは時空管理局の巡行艦【アースラ】。クロノ達はその艦内にいた。

クレアの手には新月の書が、クロノは凍り付いた刃を担いでいる。

「ユーノ君、ここは？」

「時空管理局の次元空間航行艦船の中だねえっと…簡単に言うといくつもある次元世界を自由に移動するための船」

「あ…あんま簡単じゃないかも…」

薄暗い通路を歩きながら、なのははユーノの説明を聞いている。すると不意にクレアが立ち止まり振り向く。

「いつまでもその格好とゆうのも窮屈でしょ？バリアジャケットとデバイスは解除して良いわよ」

「あ、そっか。そうですね、それじゃあ…」

なのはがレイジングハートを待機状態にし、制服姿に戻る。

「君も元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

続けてクロノがしゃがみ、ユーノに変身魔法を解くよう促す。

「あ、そういえばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてました」

「？」

二人の会話の意味がよくわかってないのはは、ユーノの方を見ながら首を傾げた。するとユーノの身体が光りだし、一人の少年へと姿を変えた。

「なのはにこの姿を見せるのは初めてになるのかな……？」

「……え？…ふええええ！？」

なのはは取り乱し、ユーノは不思議そうに首を傾げる。

「ゆゆ、ユーノ君って、男の子だったの！？」

「……あ、あれ？なのはに話してなかったっけ？ていうか、刃から聞いてない？」

「え！？聞いてないよ！知らないよ！！」

「……………本当？」

頭を掻きながら首を傾げる。

「うん！私は知らなかった！」

「ごめん、刃は気付いてたから話して…。なのはにも知らせると思ってた…」

「私だけ仲間外れ！？酷いよー！」

なのは手を振り回しながら駄々っ子のように吠える。

「本当にごめん……」

物腰低そうに謝罪する。しかしその様子はユーノの容姿もあってか、可愛らしくも見える。

「ああ、そういえば彼もそろそろ解凍してあげた方が良いわね。クロノ」

「了解」

クロノは刃を下ろし、額にローランを突き付ける。

『Thaw.』

すると表面の氷が割れるように元の状態に戻った。

「な、なんだ！？ここは！？」

床に座り慌てふためきながら周りを見渡す。いくら原作を知っていても、自分の状況を理解できていないようだ。

「ここは僕達の所属する艦、アースラの艦内だ」

そう言つてアカシックセイバーを拾う。

「あ！俺のアカシックセイバーを汚い手で触るんじゃないやねえ！お前もなんか言つてやれ！」

『触らないでください不細工。霜焼けになります』

クロノから取り戻そうとするが、子供から玩具を取り上げた大人のようにヒラリとかわす。

「まったく…所持者に似て口の悪いデバイスだな」

先程は霜焼けどころか凍り付けになっていたというのに…

それでもなおクロノから取り上げようとする刃をクレアが制止する。

「悪いけど貴方はこちらに攻撃してきた。私達としても相当の対応をさせてもらうわ」

「決闘の邪魔をしたKYが悪いだろ？親戚だからってこんな男無理して庇わなくて良いだぜ」

刃はいつも少女達にするような優しいげな笑顔で言う。しかしその言葉も笑顔もクレアの神経を逆なでるだけだった。

「あなた、何を考えているの？あのまま戦闘行為を続けていたら、いつ暴走してもおかしくないのよ？」

「それに時空管理局を知らないといっても、いきなり攻撃してくるんだ。危険人物扱いされても良い位だ」

刃は再び噛み付くようにクロノを睨む。

「フン。俺は怪しい奴から身を守ろうとしたただけだ」

「どう見てもあなたから攻撃して来たわよね？」

「…なのは変態から助けようとしたただけだ！」

「まあ、女性の身体をベタベタ触るような状態になってしまったのは謝罪しよう」

いくら攻撃から逃れる為とはいえ、なのはを抱き抱えていたのだ。下心が無いとはいえ謝るのが紳士だろう。

「ほら見る！なのはだって嫌だったろ？」

自分に惚れている少女が、他の男に触れられている。刃はなのはを味方に付けようと試みた。

「えっと…別に嫌じゃなかったよ。私を守ろうとしてくれてただけだし」

「それに刃はなのはごと攻撃していたじゃないか」

なのはも否定し、ユーノからダメ出しされる。まさに四面楚歌の状況だ。

（な、何故だ？この女も俺に味方しないし、なのはも嫌がつてないだー！？）

刃は今までずっと女性に好かれていた。いつも女性達が味方してくれている。

ニコポもナデポも無くても確実に魅了できるよう、【女たらしの才能】と【最高の容姿】を手に入れた。幸運があっただけで思惑通り…

それ以上の効果を得られた。

他の転生者が自滅したのはと関係を持ち、アリサとすずかを誘拐されたのを助けられた。

だが何故こんな事に？

（まさかKY好きの転生者？）

有り得る。

今まで女性転生者とも争った事がある。百合ハーレムを目指す者、自分の好きなカップリングを目指す者、ハーレムを妨害する者。どれも敵である事は変わらない。美少女を攻撃するのは心が痛んだが、転生者と割り切り戦ってきた。

（今は部が悪いか）

とりあえず今の所は我慢し、リンディを負かして惚れ直させれば良い。この少女より早くリンディを説き伏せ、後日確認すれば良い。万が一転生者じゃないなら、この件で自分の株が上がるはずだ。良い言い方をすればポジティブであるが、考えている事は実に邪である。

「…ごめん」

謝ったが、そこに心は全くこもっていなかった。

「さて、艦長が待っている。行こう」

クロノの呼び声で再び歩き出した。

「艦長、来てもらいました」

クレアがそう言いながら扉を開けると、そこには盆栽がいくつも置いてあり、畳とその上に茶道用具一式、そしてししおどしも置いてあり日本のイメージを無理矢理表したような光景が広がっている。そして赤い絨毯の上に、優しそうな笑みを浮かべた女性…リンディが正座していた。

「お疲れ様、まあ三人とも、どうぞどうぞ。楽にして」

リンディに驚きながら、対面にするように三人は正座をし。その後クロノとクレアがお茶と羊羹を差し出し、リンディの両隣に座った。そしてお互い自己紹介をし、事のいきさつを話し始めた。

「なるほど…あのロストログア……ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

「…それで、僕が回収しようと」

「立派だわ」

「だけど…同時に無謀でもあるわ」

笑顔のリンディに対し、クレアは厳しい口調で続けた。
その言葉に少しショックだったのだろう。ユーノは顔を伏せる。

「あの、ロストログアって、何なんですか？」

なのはが話題を変えるように質問をする。

「遺失世界の遺産。……って言ってもわからないわね」

そこからロストログアについて話しを始めた。

しかしクロノは別の事を考えている。この後のリンディの言葉だ。

【なのはの好意を利用しようとしている】「自分から協力を申し出させる」と言われているアレだ。この真意を知りたかった。母は本当に利用しようとしていたのだろうか？

もし本当ならこればかりは許せない。刃に便乗するのは癪だが今回は別だ。

「艦長、彼らをこれからどうさせるつもりですか？」

話しを続けながら念話を飛ばす。マルチタスクを利用すれば造作ない事だ。

「とりあえず民間人だし、介入しないよう伝えてから一旦帰ってもらって、落ち着かせてからまた話しを聞きましょう」

「何故一旦帰らせる必要があるのですか？今この場で止めさせれば良いだけでしょ？」

だからこそ誘導しているようにしか思えなかった。

「そうね。でも、きっとこの子達は無理強いすると黙って行動するわ。だからこそ自分の置かれた状況を理解し、いかに危険かを考える時間を与えるべきだと思うの」

クロノは絶句した。たしかに相手は九歳の子供なのだ。下手に抑えると反発し、勝手な行動に走る。自分の住む町に危険が迫りなおかつそれと戦う術を持つのだ。予想は難しく無い。

だからこそ、なのはの代わりを勤める管理局の存在を示し、ユーノと話し合い危険を冒す必要の無い事を理解させる時間が必要。そう判断しての事だろう。

「お互いに話し合って、また明日って伝えるわ」

だが目の前の男はそうは思わない。自分もついさっきまで同じ考えだったから。

「ですがそう言つと、自分から協力を申し出るのを待っているように聞こえますよ」

「あら、そうかしら？」

「たしかに僕達だけで回収は可能です。ですが三人の能力を見る限り、こちらの指揮下にいた方がスムーズに事が運びます」

「それもそうなのよね。正直に言つと【欲しい】わ。だけど危険に誘導するなんて言語道断。諦めてくれるのを祈りましょ」

「万が一協力を申し出たら？」

「もう突き放しても無駄って事ね。三人の安全を確保する為の準備をして、こちらの指揮の下協力してもらいましょ。じゃないと危なくて見てられないもの。本当はこのまま諦めてくれるのが嬉しいんだけど…」

リンディは緑茶に砂糖とミルクを入れて飲み、湯呑みを置いた。

「これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については、時空管理局全権を持ちます」

「少し言い方を変えてみるわ。アドバイスありがとう」

クロノは少しホツとし胸を撫で下ろした。これならいらぬ誤解も無さそうだ。

「「え……？」」

リンディの言葉になのはとユーノは困惑する。逆に刃は心を踊らせニヤつく。クロノはそれを見逃さなかった。

「あなた達は今回のことは忘れて、それぞれの世界に戻って、元通りに暮らすといいわ」

クレアはそんな話を話していたのを知らずにリンディに続く。

「でも、そんな…」

「次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

クロノは刃を見据えて突き放すように口を開く。
なのはとユーノは押し黙る。

「あなた達は本当に危険な事に首を突っ込もうとしているの。たし

かにこの町が心配なのはわかるわ。だけど私達を信じてちょうだい。とりあえず今日は帰って、三人でよく話し合って…ね？」

刃は一瞬ギョツとする。言っている事が少し違う。原作では帰って話し合えとしか言わなかった。何故？

しかしこのまま帰る訳にはいかない。少しでも格好良く見せたいからだ。

「おい！なんかおかしくないか？」

刃が腕を組みリンディを睨む。

「なんで話し合う必要がある？介入してほしくないならそう言えば良いだけじゃないか」

「私は危険を理解してほしいだけよ。それに、無理強いしても勝手に介入するでしょう？」

リンディの言葉を見殺して刃は話し続ける。

「ハン！どうせ俺達を利用したいだけだろ？そうだな、こんなに優秀なんだ欲しいに決まってる」

なのはに視線を移し、再びリンディを睨む。

「俺達から協力を申し出れば自分達の指揮下に入れて好きなように利用できる…卑怯だな、あんた」

「君、艦長に何を…っ！」

リンディは怒りをあらわにするクレアを真剣な表情で制止する。

「何を言いたいのかしら？」

静かに、そしてまっすぐ見据えながら口を開く。

「なのはや俺を利用しようとするお前らは信用できないって事だよ！」

立ち上がってリンディを指差し、声を張り上げる。

「人手が足りないんだろ？そんでついでに管理局にもスカウト…かこんなせこい上に汚いやり方は許さねえな！正面から正直に言いやがれよ！あんた、最低だな！」

（決まった！そんでリンディが謝ってそんで…）

自分の行動に自画自賛しつつ、今後の事を考える。あの少女も何も言って来なかったから転生者でない、または原作知識無しの可能性がある。

またもハーレム要員が増える予感に心を踊らせていたが…

「…そう。なら無理に手伝わなくて結構よ」

「え？」

リンディは笑顔で答えた。余りにも素敵な笑顔が逆に怖い位に。

「たしかに管理局は万年人手不足よ。それにあなた達がいるとより作業が楽になるのも事実…。でもあなた達にだって人生があるから

強制はしないわ。それに今回の件もクレアとクロノで対応できるし……」

「こんな奴が？い…言うておくが、俺は本気を出してないぞ！」

「クロノも同じ。それにクレアの方がクロノより魔導師として上よ」

二人の実力に言葉を失う。あのKYより強い？信じられなかった。いや、信じたくなかった。

「ああ、あとユーノ君とジュエルシードの搜索願いもさつき確認したわ。だから安心して良いのよ」

「あ、そうなんですか」

ユーノは安堵したが、部族の皆に心配をかけてしまった事に罪悪感が沸き上がる。

「ぐ…」

「でも、あなたが私達の妨害をするなら…」

リンディは笑顔を止め、刃をキツと見詰める。

「それ相当の対応をさせてもらいます」

威圧感。いや、彼女の艦長としての、一流の魔導師としての迫力に刃は圧倒される。

なのははただ呆然とし、ユーノは管理局に喧嘩を売る刃に慌てふためいている。

「……まあ、そういった事もよく考えて話し合ってちょうだい」誤解させるような言い方をしてごめんなさいね」

再び優しい笑顔に戻る。先程までとは別人のように。

「送っていいこう。元の場所でもいいね？」

「……はい」

クロノが立ち上がり、三人はその後をついて行った。

その道中、刃はずっと不機嫌だった。今日は何一つ良い事が無い。

「あの……ごめんなさい。なんかリンディさんを怒らせちゃったりして……」

なのはは周りに聞こえぬよう念話で謝る。

「構わないさ。こちらでも誤解を招くような言い方をしてしまったし。とにかく一度話し合ってくれ」

そして転送ポートの前に着いた時、クロノはユーノに小さなメモをこっそりと手渡す。

「何かあったらここに連絡してくれ。僕で良ければ力になる」

「あ、ありがとうございます」

クロノは細く微笑むと転送の準備を始める。

「じゃあ…気をつけて」

「はい」

「あの、ありがとうございました」

「チッ…」

こうして三人を元の公園に送り、クロノも仕事に戻った。

三人…できれば二人が協力を申し出るのを祈りながら。
無事、原作を進められる事を。

EP・5 アースラ（後書き）

あくまで【リンディはなのはを利用する気は無い】を前提とします

なのは達を一時帰宅させたのも、危険を理解させる為

後日なのは達の協力を受け入れたのも、断って勝手な行動をされるより、指揮下に入れた方が安全だと考えたから（協力してほしいといった気持ちもあるにはあったが、民間人である二人の安全の方が重要）

シリアル？でなのはとユーノしか出撃していなかった件

攻撃性が高くなかったから？

あくまで私の考えです

人によって考察は様々ですから、【こんな考えもあるんだな】程度でかまいません

EP・6 一緒に(前書き)

PV400000...

あ、ありがとうございます！

EP・6 一緒に

三人が帰ってから管理局の仕事は終わらず、今は前回のなのは達の戦闘記録を調査している。

「うは、すごいね。どっちもAAAクラスの魔導師だ!」

そしてパネルを操作し、その調査を行っているのが、アースラの通信主任兼執務官補佐のエドワードである。エドワードの後ろにはクロノとクレアが立っており、映像をじっと見つめている。

「ええ……」

「男の子三人組も凄いし……」

ユーノ、カレル、刃へと視線を移す。そしてなのはを見た後、ニヤニヤしながらクロノの方を向く。

「こっちの白い服の子は、クロノ君の好みっぽい可愛いらしい子だし。どうだ、実際は?」

「ノーコメントで」

クロノはそっぽを向いて受け流す。彼は恋愛事に興味が薄いからだ。

「おやおや?じゃあ義妹候補としてはどうかな?クレアちゃん」

続けてクレアに話題を振る。義妹候補と言いながらもからかっているような口調だ。

「少なくとも、クロノの手料理を笑顔で完食できる娘じゃないと認めないわ」

腕を組み、当然のように言う。

「うわ！余程味覚が狂ってない限り、そんな娘いるわけないじゃない！ハードル高すぎだぞ！」

「う、うるさい！いいじゃないか料理くらい！」

顔を赤くし喚く。その表情はただの十二歳の少年の顔だ。

「そんなんじゃ女の子にモテないよ」

「料理が得意でもあんまりモテてない君に言われたくない！」

エドワードも振り向き、からかうように肘で突つつく。

「でもあれは酷いわね。拷問に使えるレベルよ」

「艦長でさえ砂糖加えても食べれないしね。調理過程も見た目普通なのに、どうしてあんなにマズいんだろ？」

「うっ…知るか」

姉と友人からの評価に少し涙目になるクロノであった。

そうしている内に、リンディが扉を開けて入ってきた。その格好は制服ではなく、落ち着いた雰囲気私服である。

「あ、艦長…」

それに気付いた三人がリンディの方を向くと、リンディも笑顔で答え、そのままクロノとクレアの間で同じようにモニターを見る。

「ああ、この子達のデータね？」

「はい」

リンディの問いかけにクロノが答えると、彼女は真剣な表情でモニターを見上げる。

「確かに、凄い子達ね」

「これだけの魔力がロストログアに注ぎ込まれたら、次元震が起きるのも頷けます」

「あの子達、なのはさん達がジュエルシードを集めている理由はわかったけど…」

視線がフェイトとカレルに移る。

「…こっちの黒い服の子達は何でなのかしらね？」

「随分と必死な様子に見えたし…何か、余程強い目的があるのかも」

クレアもアップになったフェイトの映像を見る。

クロノは黙って二人の会話を聞いていた。原作を知ってるとはいえ、

余計な事は言えない。下手に話しても情報の出所を聞かれてはアウト。転生に関わる事は転生者以外には知らせる事ができないのだ。たとえどんな手段を用いても…

それともう一つ気掛かりがある。フェイトに付いた転生者だ。カレルという名前以外は程情報が無い。何が目的で介入をしているのか、原作知識があるのかどうかも不明だ。

幸い、刃のように馬鹿げた力も無い。しかし、それ以外は別だ。ハルバードなどという複雑な複合武器を使いこなし、魔力運用も無駄が無い。対処できない程のレベルではないが、簡単にはいかないはずだ。

（せめて、刃と違うタイプだと良いが…）

そう祈りながら、心の中で小さくため息をついた。

なのは達三人はまだ公園にいた。刃の家は高町家から距離があるので、帰宅しては話すのが難しくなってしまうのだ。

「やっぱり、ここで終わりなのかな…」

なのははそう呟くが、このまま引き下がりがたくない気持ちもある。この町を守りたいから。

「……畜生……」

刃は焦っていた。何めかもぶち壊されたこの状況。なのは達のやる気も失せ始め、介入どころかここで終了になってしまいかもしれないのだ。

「……僕は、正直潮時だと思う。これ以上二人を危険な目に合わせたくないし……」

「ユーノ君……」

ユーノは二人を巻き込んでしまった責任を感じている。だからこそ手を引いて欲しいと思った。

しかし刃は諦めなかった。なんとしてでも介入すると。

なのはのやる気を上げるにはどうすれば良いか？簡単な事だ。フェイトがいる。

「俺は止めないぜ」

「刃君……」

「刃、流石に管理局と敵対するなんて無茶だ。やっぱりプロに任せた方が……」

「いや、敵対なんかしねえよ」

立ち上がり二人の前に立つ。

「管理局に協力する……癪だけだな。第一、俺達がいた方が楽だって言っていた。つまり協力してくれた方が嬉しいに決まってる」

自信に満ちた声で二人に呼び掛ける。その容姿もあってか、何か一種の魅力すら感じる程に。

「俺はこの町を守りたい。管理局と協力すれば、より早くジュエルシードを回収し解決できる…違うか？」

「うん…」

なのは小さく頷く。

「それにこのまま引き下がればフェイトと話しもできなくなっちゃうぞ」

「……あ！」

そう、この件から手を引くという事は、フェイトとも関われなくなってしまうのだ。なのははなんとしてもフェイトと話したい、決着を付けたいから…

「うん！頼んでみようよ！」

「決まりだな！ユーノはどうする？べつに部族に帰って良いぞ」

むしろ帰って欲しい。刃にとってユーノも邪魔でしかないから。

「二人を置いて帰れる訳ないだろ！僕も行くよ」

「ユーノ君……うん！皆で！！」

当然ユーノは帰る気は無い。むしろ自分が原因なのだ。一人で管理

局に協力する気でいたくらいだ。

（やっぱりか…。仕方ねえ。精々俺を引き立てろよ淫獣）

それぞれの思惑は違えど、介入する事を決意した三人であった。

ここはフェイトの拠点であるマンション。あの場から撤退したカレル達は、ひとまずここに戻って来た。

フェイトはソファーに横たわっている。やはりクレアの攻撃は効いたようだ。

「ダメだよ！時空管理局まで出てきたんじゃ、もうどうにもならないよ。逃げようよ…二人でどっかにさ…」

「それは…ダメだよ」

管理局という組織を相手にするには部が悪すぎた。いくら優秀な魔導師とはいえ、個人が組織に勝つのは簡単では無い。

しかしフェイトは止める事はできなかった。母親の為に…。絶対に。

「だって！雑魚クラスならともかく、あの二人は一流の魔導士だ！本気で捜査されたら…ここだっていつまでバレずに居られるか…あの鬼ババ、あんたの母さんだって、訳わかんないことばっか言うし！フェイトに酷いことばっかするし！」

アルフは我慢ができなかった。プレシアの行いに。こんなにも一生懸命な娘を…あんなふうに扱える彼女が理解できなかった。

「母さんのこと…悪く言わないで」

何をされようと、どんな仕打ちを受けようと堪えた。自分が悪いから、期待に答えられなかったから…そう自分に言い聞かせて。全てが終われば、また笑ってくれる、元に戻ると信じて。

「言うよ!」

アルフは涙ぐみ俯く。

「だってあたし…フェイトの事が心配だ!フェイトが悲しんでると、あたしの胸も千切れそうに痛いんだ…」フェイトが泣いてるとあたしも目と鼻の奥がズンとして、どうしようもなくなるんだ!フェイトが泣くのも悲しむのも…あたし嫌なんだよ!」

ずっとフェイトが心配だった。誰よりも大切な人だから。

「……私とアルフは…少しだけ精神リンクしてるからね。ごめんね、アルフが痛いなら、私もう悲しまないし泣かないよ…」

「あたしは…フェイトに笑って幸せになってほしいだけなんだ!なんで…なんでわかってくれないんだよあ」

「ありがとう、アルフ。でもね…私、母さんの願いを叶えてあげたいの…母さんの為だけじゃない…きっと、自分の為…だから…」

「約束して。あの人の言いなりじゃなくて…フェイトはフェイトの

為に…自分の為だけに、頑張るって。そしたら…あたしは必ずフェイトを守るから…」

それしか言えなかった。せめて彼女の意思の為に自分も戦う。必ず守る…絶対に。

「うん」

フェイトは小さく頷いた。

するとドアが開き、学校の制服姿のカレルが入って来た。

「追跡とか無さそうだぜ」

「ああ、すまないねカレル」

アルフは顔を拭いカレルの方を向く。カレルも気付いたが何も言わなかった。理由はわかっていているから。

「……カレル。管理局も来たし、もう良いよ。これ以上はカレルに迷惑をかけちゃうし」

フェイトはソファアに座りながら言った。あくまでカレルは現地協力者。これ以上関わらせれば犯罪者として狙われかねない。

「あのな。今さら無いだろそれは」

近くの椅子に腰を下ろす。

「ここまでやったんだ。最後まで付き合っぜ」

「だけど、管理局なんだよ？一応あなたの母親も管理世界出身なん
だろ。マズいじゃないか」

二人にはすでに自分の家族の事を話している。だからこそ管理局の
存在も認知していた。

「もう遅いつての！」

椅子から跳ねるように立ち二人へと歩み寄る。

「すでに攻撃しちまったし。だから手遅れって訳だ」

微笑みを崩さず手を差し出す。

「刃つてやつとも決着を付けたいしな。トコトン付き合っぜー」

あの男の自由にはさせない。絶対に。

「カレル……」

フェイトアルフは顔を見合わす。

「本当に良いの？」

「俺がいつ嘘ついた？」

「覚悟はできてるんだろうね？」

「あつたりめえよ！」

最初に会った時から。原作に介入すると決めた時から。

「……まあ、あの臭い奴の相手も必要だし…フェイトが良いならあたしもかまわないよ」

アルフにとって刃は本能的にも嫌悪する存在だ。まるで発情期の猿のような…とにかくフェイトに近づけちゃいけない。カレルを盾に使うようで心が痛むが、彼ならフェイトを守ってくれる。そんな予感がした。

「……ありがとう。うん、これからよろしくね」

フェイトは笑顔で答えた。アルフだけじゃない。傍にいてくれる【友達】の存在に、言いようの無い喜びがあった。

「お、おう！俺に任せな！アッハハハハハハ！！！」

誤魔化すように高笑いをした。何故なら、自分の顔は熱いくらい赤くなっていたのだから。

（な、なんか顔が熱いんだが…。熱でも出たか？これからって時に冗談じゃねえぞ！）

少年の心に小さく芽生えた想いに気付かぬまま、少年と少女、その使い魔の夜は過ぎていった。

EP・6 一緒に（後書き）

フエイトは鈍感でも良いと思います

あれ？早くも候補から脱落？

EP・7 艦の日々（前書き）

少しですが彼女の登場です

EP・7 艦の日々

八神はやては普通の少女ではない。車椅子生活の孤児……それだけでは無い。彼女の周りはいつともトラブルが絶えなかった。

本を借りに図書館に行けばいつも誰かが本を取ってくれる。だがすぐに取ってくれた子は他の子と喧嘩をはじめてしまう。

しかも取ってくれた子は皆おかしい。善意を程感じないのだ。少女達は自分でない何かを見て、少年達の舐めるようないやらしい視線は寒気すら感じる。

そして今年に入ってから、自ら【孤児】を名乗る者が何人も現れた。まるでその事をアピールするように話すのが信じられなかった。それがとても不気味で、得体の知れない恐ろしさがあった。

高町なのは、ユーノ・スクライア、神道刃の三人はアースラに民間協力者として搭乗する事になった。

そして翌日、ここアースラの会議室にてアースラスタッフにリンデイから伝達があった。

そこは薄暗いながらも床から明かりが差し込み、何か不思議な雰囲気を感じ出している。

「というわけで…本日0時をもって本艦全クルーの任務をロストロギア、ジュエルシードの搜索と回収に変更されます。また本件については…特例として…本ロストロギアの発掘者でもあり…結界魔導師でもあるこちら…」

「はい、ユーノ・スクライアです」

リンディの紹介にユーノが席を立ち挨拶をする。

「それから彼の協力者でもある現地の魔導師方」

「た、高町なのはです」

「神道刃だ」

なのはは緊張しながら、刃はふてぶてしく立ち名乗る。対照的な二人だが、聖祥の制服姿である事だけは同じだった。

「以上三名が臨時局員として事態に当たってくれます」

「「よろしくお願いします」」

「フッ……」

礼儀正しくお辞儀するなのはとユーノとは違い、刃はカッコつけるように小さく笑う。たしかにその美貌があつてか格好良くは見える。だが状況が状況なだけで非常に態度が悪い印象を与えてしまっている。

クロノは刃の高慢な態度に頭を痛め眉間にシワを寄せ、クレアも苦笑いしながらなのは達を見る。するとなのはと視線が合い、なのははニツコリと微笑んだ。クレアはそれに答えるように小さく微笑む。刃が自分に向けられたと勘違いしているのには気付かなかったようだが。

そして会議が終わり、なのは達はクレアに呼ばれアースラの一室に集まった。

「さて、どうやらなのはと刃の二人は正式な魔法教育を受けていないのよね？」

なのは、刃には机が与えられ、ユーノは二人の前に立つクレアの隣にいる。

「はい」

「まあな」

またもなのはと違い自慢げに刃は答えた。

「……このままロクな教育も無く魔法を扱うのは危険……という訳で、私があなた達二人に教える事になったわ」

付け焼き刃だが有ると無いとでは大違い…と判断したのだろう。いくら能力が高くとも民間人、安全を確保する為に必要である。

「あれ？じゃあユーノ君は？」

「僕は学校を出てるから…」

「だからユーノには私の助手をしてもらう事になったの」

「ふうん。じゃあよろしくね、ユーノ君、クレアちゃん」

なのはは二人から魔法を教わる事に心を踊らしている。ユーノからも今まで教わって来たが、適性の異なる彼には限界がある。そこにクレアが加わるのだ、今までと違い、より一層魔法について学べる。刃も同じく楽しみにしていた。なのはと違い、クレアという美少女に教われる事にだ。十四歳にしては幼い容貌に艶やかな黒髪…リンディの容姿から予想できるように、将来が楽しみな少女である。

「そついえばクロノはどうしたの？」

「ああ、クロノならさつき海鳴に行つたわ。仕事にね」

「KYが海鳴に？」

ここは海鳴の市街地。クロノは何人かのスタッフと共に現地に赴いていた。現地の調査とサーチャーの設置の為である。

万が一市街地で発動した場合等、あらゆる可能性を考慮しながら調査をしていく。

「じゃあここからは各自サーチャーの設置に入る。作業終了後はここに再び集合、その後転移魔法でアースラに帰還する」

「了解」

クロノの指揮の下、スタッフ達は散開し作業を開始した。

「よし、行くか」

クロノも作業を開始したが、彼には一つだけ目的があった。仕事には関係の無い事…海鳴の景色をゆっくり見たかったのだ。

彼は転生者で、元々は日本人。日本の風景は懐かしい。実に十二年ぶりだ。

たしかに日本に似た世界も管理世界にある。だが地球では無い。だからこそこで作業するのが楽しみだった。

（日本か……何もかも皆懐かしい…）

そんな某宇宙戦艦の艦長の台詞のような事を考えながら海鳴を歩き回っていた。勿論仕事も忘れてはいない。

（しかし…かなり忘れているな）

日本語だ。流石に十二年も触れなければ忘れてしまう。文字も読めないのが多い。それだけでなく、見た事のある店もあったがどんな店なのかわからない。

（まあ良いか）

今の自分は異世界人なのだ。深く考えるのはよそう。クロノはこの風景を楽しみながら作業に戻った。

しかしクロノは気付いていなかった。自分を見るいくつかの視線がある事を。

転生者達だ。クロノ・ハラオウンの出現。それはアースラが現れた

事を意味している。何人かはこっそり覗いていたが、黙々と作業をするクロノに飽きて覗くのを止めていった。時折玉の輿狙いの転生者が声をかけるが、相手にせず作業を続け、いつしか転生者はいなくなっていた。

いや、一人だけまだ監視している転生者がいる。刃である。彼は新月の書を使いクロノを監視していた。理由はクロノが転生者かどうか調べているのである。

呼び出して転生について話せるか確認する方が手っ取り早い、二人きりになるなんて気色悪いし呼び出す理由が見当たらない。よって監視をしていたのだ。

クロノが転生者なら、今考えられる行動ははやてとの接触である。地球に来て、なおかつ海鳴で一人で行動したのだ。実に怪しい。

自分も何度か接触する為に図書館に行ったが、転生者同士の足の引っ張り合いに巻き込まれたり、遠目で一度見たつきりである。おそらくこいつも転生者のいざこざに巻き込まれるはず。残念がるクロノを見ようと監視を続けた。

しかしクロノは図書館に行かず作業を終え、集合場所へと歩き出した。結局刃は転生者でないと判断し監視を止めてしまったのだ。

そのため、この後の出来事を見逃してしまった。

クロノは手にした端末機でサーチャーを確認しつつ集合場所へ向かっている。すると前から声が聞こえた。

近づくところには、車椅子の少女と刃のように桁違いに整った顔をした一人の少年がいた。

(……まさか)

クロノの予想は的中している。車椅子の少女は八神はやて、少年は

転生者だ。しかしこの二人の様子がおかしい。

「俺さ、家族がないんだ。両親も死んじまってさ」

「そ、そうなん……えつと…大変やな…。まあ私も似たようなもんやし…ほな私はこのへんで…」

自分が孤児である事を必死にアピールし、はやては顔を引き攣らせていた。

はやてに家に招待されそのまま住み着くつもりなのだろう。だがその思惑は失敗に終わりそうだ。どう見てもはやては少年を拒絶している。自分の立場からして今は接触するのはまずい。それにこのまま無視しても少年ははやてに嫌われて終わりだ。無視しよう。そう思ったがクロノは通り過ぎなかった。

「君もか。寂しかったんだな…」

「い…嫌………」

少年がはやての頭を撫で出した。するとはやては泣きそうな表情でぎゅっと目をつぶり、怯えるように身体を震わした。その様子があまりにも痛々しく、とてもほっとけない状況だった。

「君、止めないか!」

気が付いたら少年の手を取り、はやての頭から退かしていた。

「なっ!?!」

「……!」

少年はここにいるはずのないクロノ・ハラウンに、はやては突如現れたクロノに驚く。

「くっ…！このKYが！」

少年はクロノ睨みつけ腕を振り払う。

「初対面の人にKY呼ばわりされる筋合いは無いんだがな」

「はあ？空気読めよお前。どう見ても…」

「どう見ても彼女は嫌がっているだろ！」

若干怒りが込み上げて来た。はやてが嫌がってなければ何も言ってもりは無い。だが泣きそうな程嫌がっているのだ。とても無視はできない。

「嫌がつてる？そんな訳ないだろ？」

微笑みながらはやての頬に手を伸ばす。だがその手は払いのけられた。

「嫌……来ないで…」

「な！？」

はやてに拒絶され驚く。ニコポもナデポも無いのにどうして気に入られたと思ったのか不思議だ。

「馬鹿な……俺は超イケメンなんだぞ……有り得ねえ……はっ！」

何か思い付いたようにクロノに振り向く。

「てめえ、何しやがった！」

「何もしていないさ」

「嘘つくな！俺が嫌われるなんて有り得ない。お前が何かしたんだろ！」

そして殴り掛かってきた。

勘違いも甚だしい。顔が良ければ良いって問題じゃない。

クロノは呆れながらパンチを避け腕を掴み、背負い投げをする。

「がつ！？」

勢いよく地面に叩き付けられ、無様にのた打ち回る。

「今すぐ立ち去るんだ。次は本気でやるぞ」

「ぐっ……なんで……オ……主の……ちっ……！」

腰を押さえながら逃げていく。その姿はあまりにも惨めに見えた。

「大丈夫かい？」

「ヒッ！？」

クロノが話し掛けるとはやては身体を強張らせる。

「ああ…すまない。怖がらせてしまったかな？」

クロノは少しはやてから離れる。

「あの…えつと…ごめんなさい。私、男の人が苦手で…」

「ああ、そういう事か。ならこのまま帰るとしよう。じゃあ、気を付けて」

正直クロノもあまりはやてと関わりたくなかった。グレアム達が見ているかもしれないからだ。

「あ、あの！」

クロノは立ち去ろうとしたが、はやての呼び声に振り向く。

「助けてくれて、ありがとうございました」

はやてはペコリと頭を下げ、車椅子を操作して行ってしまった。

(……大丈夫だね、これくらいなら)

はやては車椅子だ。もしかしたらアーススタッフの誰かが、困っているはやてを手助けしたりしたかもしれない。それにすぐに別れたのだ。名前すら名乗っていない。何一つ問題無い。

そう言い聞かせながらクロノは歩き出した。

EP・7 艦の日々（後書き）

同じ孤児だからってすぐ一緒に住もって事にはならない気がします

EP・8 学ぶ（前書き）

皆さん色々とアドバイスありがとうございます
矛盾点等を解決できるよう頑張ります

EP・8 学ぶ

三人がアースラに乗艦してから三日後。ここはアースラの食堂。そこにクロノは座っている。現在は昼食の時間、目の前のプレートにはサラダやパンが並んでいた。

（……寿司が食べたい）

そんな事を考えながらパンに手を伸ばす。

折角日本に来たのだ、久しぶりに本物の寿司を食べたい。だが勝手に外出する訳にもいかず、ましてやアースラに生食用の魚なんかあるはずがない。あつたら衛生上問題である。

「あ、クロノくん！」

同じように昼食を食べに来たのであろうなのはとその後ろから刃、ユーノが続く。三人の手にはそれぞれ昼食のプレートが見える。

「一緒に食べよう」

「ああ、かまわないよ」

「じゃあお邪魔するねクロノ」

クロノの対面側の席に三人が座る。刃が何も言わなかったのが不気味だが、下手な事を言っただけなのはの反感を買わないようにしているのだろう。

「どうだい、順調か？」

「うん。クレアちゃん教えるの上手だし」

ドレッシングを取りながら笑顔で答える。

「姉さんは教えるの上手だからね」

「姉さんか……なあ、ちょっと気になってたんだけどよ、お前ら双子か？」

刃が珍しくまともな会話を振ってきた。

「いや。姉さんは僕より二つ上だ」

「「「え?」「」」

三人とも驚く。流石に二つも上なら年齢的に身長差があってもおかしくない。なのに二人の背格好はあまり変わらないのだ。

「じゃあクロノは……」

「僕は十二、姉さんは十四だ」

クロノの身長は年相応か少し低いくらいだ。それを考えると二次成長の真っ只中であるクレアがいかにか小柄かわかる。その上女性の方が成長期に入るのが早いいため、若干不安さえ感じる。

「クレアちゃんって、私達より五つも上だったんだ……」

「僕、刃と同じくクロノと双子かと思ってた……十二くらいの」

「……………ありだな」

なにやら不穏な言葉が聞こえた気がしたが聞き流す事にする。

「おやおやゝ。皆お揃いだね！」

両手にプレートを持つエドワードと、その後ろからクレアが現れた。二人も昼食に來たようだ。そして二人はクロノの隣に座る。

「クレアちゃんとエドワードさんもお昼ご飯ですか？」

「ええ。エドに誘われて」

「まあ時間も時間だし、皆來てるからね」

刃がクロノが転生者ではないかと疑った理由に、エドワードの存在もあった。彼の苗字はリミエツタ。そう、彼はTSしたエイミィだと気付いたのだ。それならクレアはTSしたクロノであるはず。そう考へて行動を起こしたのだが結果はこの通り、勝手な思い込みで転生者でないと判断したのだ。

そうして一層賑やかになり、ランチタイムは過ぎていった。

「じゃあ僕はこの辺で…」

食事を終えたクロノが立ち上がる。

「あれ、もう行っちゃうの？てか量少なくない？」

「うん。午後は訓練室に行くから軽めにしたんだ」

満腹で身体を動かすのはあまり良い事ではない。だからこそ昼食は軽くすませたのだ。

「じゃあね」

クロノは後片付けにカウンターへ向かって行った。

「訓練室かあ…」

なのはが呟く。

実はこの三日間、ずっと座学の講義だったのだ。そのため程魔法を使っていない。

そんななのはの気持ちを察したのか、クレアがある提案をした。

「じゃあ、午後は訓練室の見学に行く？」

「行く！！」

なのはと刃の声がハモリ、二人して身を乗り出した。

アースラの訓練室。ここにはクロノと何人かの武装局員がトレーニングをしていた。

自主トレの時間なのか、みなやっている事はバラバラである。身体を鍛える為に筋力トレーニングをする者、StrikerSでテイ

アナがやっていたようなターゲットを用いる動作訓練をする者、的を用いて魔法の効果を確認する者様々だ。
するとドアが開き、クレア達四人が入って来た。何人かは気付き、上官でもあるクレアに挨拶をする。

「ここが…」

「うわぁ…」

「ほう…」

なのはとユーノは一生懸命自らを鍛える局員達に感激していたが、刃は模擬戦をしたくてウズウズとしていた。

この三日間は実に暇であった。たしかに座学はためになるが、力のある自分には実戦で鍛える方が相応しいと思っていた。それよりも魔法を使いたい、自分の力を使いその快楽を味わいたかったのだ。

「あ、クロノだ」

「え？どこ？」

「あそこ。何人かの局員さんと一緒にいるよ」

ユーノが指差した方向にクロノはいた。三人の局員と四角になるように並び、目を閉じて瞑想するように集中している。よく見ると、彼ら一人一人の周囲にはいくつもの魔力弾がその身体を包むように走っている。

クロノ達が行っているのは魔力の制御訓練だ。魔力弾を自分の周囲を様々な向きに飛び回らせ、お互いにぶつからないよう操作している。それだけでなく、各自の魔力弾の道が重なるように立っている

ので、難易度はさらに上がっている。

当然クレアもこういった誘導制御訓練を日頃から行っている。ステインガースナイプのような桁違いの操作性を持つ魔法も、厳しい訓練の賜物なのだ。

他にも設定された出力の違うターゲットをランダムに撃ち抜く出力制御訓練、魔力を用いない体術訓練など厳しい訓練を他の局員と共にこなしていった。

「すっごい！」

「今日はちょっと激しい方かな。もしかしたら皆が来ると思って張り切ってるのかも」

実はあながち間違いでは無い。やはりクロノも見られるかもしれないといった状況では張り切ってしまうものだ。

クロノは一通りの訓練が終わり、汗を拭きながら壁に寄り掛かる。

「クロノ二尉、どうぞ」

「ああ、ありがとう」

短く刈り込んだ短髪の局員からドリンクを受け取り一口飲む。身体に水分が行き渡る感覚が心地好い。

彼らはクロノを名前で呼んでいる。実際、なのは達がいなければア

ースラで最年少の局員であり、ハラウン姓を持つ人物が三人もいるのだ。階級は違ってもややこしい部分がある。さらにはリンディのおおらかな人柄もあってか、仕事に支障が出ない程度にフレンドリーなのである。

「あ…なんか模擬戦始めるみたいですね」

見ると刃が一人の武装局員を連れ、訓練所の真ん中に移動した。そして四人は各々のデバイスを構える。

（何故模擬戦を？挑発？まさか、彼がそんな幼稚な人ではないし…。多分、模擬戦をしようと言い出した刃を少しからかうつもりなんだろうな）

大人の現実を見せてやろう、力だけではどうにもならない事を教えてやる。そんな事を考えていたのかもしれない。

「クロノ」

「何？姉さん」

不意にクレアから念話が入る。

「刃がやり過ぎる可能性があるわ。一応止める準備はしといて」

この男ならやりかねない。そんな事が頭を過ぎり、サーっと血の気が引く。

「なんで許可したの!？」

「ごめん。彼が忠告を聞いてくれなくて…。笑って聞き流すのよ」

実際、刃の実力は一般の武装局員よりは高い。あの火力で暴れれば、B―Cランクには脅威だ。

「わかった。準備はしておく」

「お願い。私も一応医務室に連絡しておく」

厄介な事にならない事を祈り、待機状態のローランを握った。

模擬戦は見ていて気持ちの良いものではなかった。辺り一面を被うように魔力弾をばらまく。一発一発がかなりの威力であり、反撃を許さないような弾膜を展開している。幸い軌道は単純なため、回避は難しくないが局員は劣勢を強いられていた。

「ハハハハハハ！バオウ・ザケルガ！！！」

ついに特大の攻撃魔法を放った。新月の書の頁が破れ、放たれた巨大な雷の龍が襲い掛かる。

（あれはまずい！）

非殺傷設定とはいえ、あんな火力をくらっては危ない。考えるより先に感じた二人は飛び出した。

局員を掴み、攻撃の範囲外に離脱する。

そして目標を失った龍は床に衝突し、あたりに雷を撒き散らした。

「ハア…ハア…。刃！何をやってるんだ！」

「あんな大出力の魔法、危ないでしょ！」

息を荒げながら叫ぶ。

「ああ、ごめん！つい力んじまってさ」

「…次からは気をつけて」

模擬戦を止められなかった自分にも責任はある。そう思ったのか、クレアは追及しなかった。

（もう絶対に模擬戦はさせないわ。下手に暴れて怪我人を出したり、ここを壊されちゃたまらないもの）

クレアは小さくため息をついた。

局員は攻撃そのものは程避けていたため、特に問題も無く部屋から出ていき、なのは達もクレアに連れられ自室へと戻っていった。

「さっきの模擬戦、どう思う？」

先程の短髪の局員に話し掛ける。

「一言で言うなら……技術も無い野蛮な戦い方…ですね」

そう、刃の戦闘スタイルはごり押し。魔力任せの目茶苦茶な戦い方なのだ。

「同感だ。ああいう【力のある馬鹿】は二番目に質の悪い奴だ」

「一番は？」

「【力があって、尚且つ使いこなしている馬鹿】だ」

ただ力があるだけなら押さえられる。しかし使いこなしているのな
らより一層厄介だ。

「っ！じゃあなんで魔法教育なんかしているんですか！」

「僕も艦長に言ったんだが、万が一があつた場合、何もしていなければこちらに非ができる。だから必要最低限に留める事にしたんだ」

刃が民間人である事が災いし、彼の事をほうっておけないのだ。

「しかし…。せめてデバイスを没収するなりどうにかできないのですか？あの子は危険すぎます！」

「やろうとしたさ。だができなかった。魔導書の一部である銃もだ」

乗艦した際に、出所不明で、さらに危険行為の可能性があるため新月の書をアースラで預かる事になった。しかしこの魔導書は刃の手元に自在に転送できるのである。

「しかも凍結させても強制解除するんだ。どんな手段を用いても、あの魔導書を彼から引き離す事ができない」

「そんな…」

刃の身柄を拘束したとしても、留置場や刑務所に入れても呼び出して逃げれる。絶対に失わない力なのだ。

「だけど、一つだけ穴があるかもしれない」

「穴？」

「まだ予想だけど、あの魔導書は自動的に動けず、刃の意識でのみ力を発揮するんじゃないかと思う」

「意識のみ…」

クロノは軽く頷く。

「初め彼を連れて来た時、刃は凍結状態だった。魔導書を凍結させても解除できるのに、何故刃自身は解除されなかったのか」

「……あつ！でも、そうなると…」

「ああ。刃を犯罪者として対処する場合、高い確率で逮捕でなく殺害処分になる…」

管理局では基本的に非殺傷設定で魔法を使用するため、殺傷設定の使用が許可されるのは極めて稀である。

「彼が更正してくれるのを祈るしかないな……」

EP・8 学ぶ（後書き）

役職と階級は別のようなので、設定を修正したようにクロノの階級を二等空尉にしました

EP・9 嵐の日（前書き）

…今回はちょっと庇護しきれませんでした

例のアレです

EP・9 嵐の日

カレルとフェイトはシリアルVのジュエルシードを新たに発見、封印した。本来この時期に発見したシリアル？は、カレルとの出会いの時に回収していたのである。

そして今、彼らは海の上にいる。海は少し波打っているが、特に異常は見当たらない。

（正確な位置は掴めないから、海に魔力流を撃ち込んで強制的に発動させて捕まえる…か。どうやらあつちは海を見つけてないみたいだな）

カレルの目の前ではフェイトが巨大な魔法陣を展開し詠唱を始めている。

「アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神よ。いま導きのもと降りきたれ…」

本当なら男である自分がやるべき、しかし自分にはこういった広域魔法は習得していない。ならば封印に力を注ぐまで。

「悪いなアルフ。封印しか力になれそうにない」

「それだけでもましさ。ちゃんと働いてもらおうよ」

「当然！」

ゼファアの柄を強く握りしめる。

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル。撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス…」

フェイトは詠唱を終えて魔力を撃ち込む体勢に入った。そして大量にあった金色の魔力スフィアに目のような模様が浮かび上がり、雷を海に降らせる。

「はあああ!!!」

掛け声と共に魔力が撃ち込まれた。そして海から光が立ち上り、巨大な竜巻となる。それはあまりにも巨大で、吹き飛ばされそうな風も吹いていた。

「ハアハア…見つけた！残り…六つ…！」

肩で息をしながら海から立ち上る六つの竜巻を見つめる。

「アルフ、空間結界とサポートをお願い」

「ああ、任せといて！」

カレルはフェイトの前に立ち、ゼファアを構える。

「後は俺達に任せて少し休みな」

「うっん、私も行くよカレル。バルディッシュ、頑張ろう！」

『Yes, Sir.』

フェイトはそのまま荒れ狂う海へと飛んで行ってしまった。

（全く…無茶しやがって）

カレルも後を追うように飛び出した。願わくは、なのは達の介入が早くなる事を祈りながら、彼女を守るよう己の愛斧を構えた。

一方アースラ。

さらに数日が経過し、三人がアースラに来てから十日。新たにジュエルシードを三つ回収したのだが、それ以来全く反応は無かった。勿論、フェイトとカレルとも鉢合わせる事も無く。そんなある日、なのははクレアの部屋にいた。

「……で、お話しって何かな？」

クレアはコーヒーを自分となのはの前に置いた。勿論なのはの所にはミルクと砂糖も忘れない。

「えっと…相談と言うかなんと言うか……」

もじもじしながらコーヒーにミルクと砂糖を混ぜる。

「私にとって事は、女の子にしか相談できない事？」

「えっと…二つあるんですけど、まず刃君の事なんですけど…」

クレアは少し顔をしかめたが、すぐさま優しく微笑む。

「彼がどうしたの？」

「あの……実は……」

要約すると恋愛相談であった。小さい頃から好きであった事、友人達も彼に好意を持っている事……

どれも刃に対して良い印象が無く、恋愛経験も無いクレアにとっては反応に困る話であった。

「でも、なんだか最近疑問に思うの。本当に私は刃君が好きなのかなって……」

「どういう事？」

促すように言いながらコーヒーを口に運ぶ。

「ジュエルシードを集めるようになってからんだけど、刃君がおかしいの」

クレアの目には最初からおかしくは見えなかった。それに最近は自分に妙な視線を送るようになってるのが実に気味が悪い。

「最初は二人だけの秘密で嬉しかったんだけど、ユーノ君やフェイトちゃんと一緒にの子……カレル君に対してなんだか乱暴に見えて、クロノ君にも……」

「まあクロノも嫌っているから問題は無いけど」

実際はお互い嫌っているなんてレベルでは無かった。クロノにとつては超危険人物、刃にとってはハーレムの邪魔者でしかないのだ。

「そういうのが少し怖くて……今まで優しかったのも嘘みたいに見えるちゃうんだ……。そしたら急に刃君の事が……」

「……成る程ね」

クレアは理解した。刃はただの女好きで、自分以外の男性が目を付けた女性の傍にいるのが嫌なのだと。

だから自分にもやたらと格好つけた視線を送り、なのはの近くに来るであろうユーノを嫌い、フェイトの傍にいるカレルを嫌い、なのはに触れたクロノに攻撃を仕掛けたのだろう。なんて身勝手に独占欲の強い少年なのだろうか。

（これで九歳つてのが信じられないわ）

正直、なのはに刃はどうしてもない変態だと言ってやりたかった。しかしあまりストレートに言うのも気が引ける。ならば少し言葉を選ぶしかない。

「多分……なのはが抱いていたのは恋じゃないんじゃないかな」

「？」

首を傾げるなのはに、クレアは続ける。

「彼は……まあ、顔は良いじゃない？それで優しかったら、少しは【良いな】って感情があると思うの。なのはそれをオーバーに捉えちゃったんじゃないかしら。だから彼がプレイボーイ気取りな所とか

が嫌になつて離れなくなつちやつたのよ」

「ふむふむ」

なのははクレアの言葉に頷く。

「本当に好きなら彼を正そうするものよ。そういう気になれないなら好きじゃないのよ…きつと」

半ば出任せのような事を一気に言う。クレアも思春期の少女なのだ、恋愛にも人並みには興味がある。しかし仕事も楽しく周りに同年代の異性が少ないため、自然と機会を逃している。今のもあくまで個人の妄想に近い恋愛価値観によるものだ。しかしなのはの心を動かすには十分な説得力を持っていた。

「そっか……うん。ありがとう！なんだか少しすっきりしたよ」

クレアの手を取り、笑顔でお礼を言う。クレアもたじろぎながらも笑顔で応える。

「そうそう。男なんて星の数ほどいるんだし、まだ九歳。いくらでもチャンスはあるわ」

「うん、そうだね」

まるで合コンに失敗したOLのような会話だ。誤解の無いように言っておくが、彼女達は十四と九歳の少女である。

「それでもう一つは？」

「えっと…フェイトちゃんの事なんだけど…」

フェイトの名前が出たとたん、クレアの顔が一瞬厳しくなるがすぐに表情を戻す。

「彼女がどうし…」

その瞬間、艦内に警報が鳴り響いた。

『エマージンシー！搜索域の海上にて、大型の魔力反応を感知！』

おそらくジュエルシードであろう。
クレアとなのはは立ち上がる。

「話しは後にしましょ」

「うん」

なのはは軽く頷き、二人はブリッジへと駆け出した。

ブリッジにはすでにクロノやユーノ、刃が到着しており、目の前のモニターには戦闘しているフェイトとカレルが映っていた。フェイトは疲弊し、カレルとアルフも手こずっているのがわかる。

「なんとも無茶する子ね…」

「フェイトちゃん！あの…私…急いで現場に！」

「……………」

すぐにもなのは現場に向かおうとするのはと違い、刃は行くかどうか決めかねていた。

フェイトとアルフだけならとっくに出ている。しかしカレルの存在が彼を悩ませていた。カレルが撃墜されてからフェイトを助けるのがベストだが、どう見ても疲弊しているフェイトの方が先にやられるだろう。カレルを助けるのは吐き気がするような事だ、可能ならやりたくない。ついでにこの竜巻に飲まれて死んでほしい、そこに颯爽と現れてフェイトを慰める…そんな醜悪な事を考えていた。

「その必要は無いわ。放っておけばあの子達は自滅する。自滅しなかったら力を使い果たしたところで叩く」

「そんな…フェイトちゃん…」

「気持ちはわかるけど、私たちは常に最善の選択をしないといけないの。残酷に見えるかもしれないけど…これが現実」

クロノは苦虫を噛みつぶしたような表情をする。

そう、これが無印最大の問題行動と言われる、フェイトを見捨てるような行動…。クロノには黙って見る事ができなかった。

管理局が求めるのは次元世界の平和。間違いなくフェイトがしてきたのは危険行為で犯罪である。だからこそ、こうした非情な手段もとる必要があるのはわかるが…

（僕にはできない…）

問題視されている点を考えてみる。

まずは子供相手という事だ。これはミッドチルダの就職可能年齢が低く、能力さえあれば誰でも社会人になれるのだ。そうなってしまう、子供であろうと容赦はしない風習ができてしまうのも考えら

れる。

次に暴走したジュエルシードの危険性の無視。これはリンディの存在が関係している。彼女は【フェイトが暴走させた六個】よりも大掛かりな「プレシアが暴走させた九個」を抑えてみせたのである。それならば防ぐ事が可能であろう。

そして一つ考えられる事が、なのは達を向かわせなくなかったのではないだろうか。六個のジュエルシードの暴走地点なんて危険な場所に行かせるのはとてもできなかったのだろう。

だがそれでもクロノにはこの選択が良いとは思えなかった。

フェイトの捕獲なら原作の戦力差でも容易いはず。疲弊した魔導師とその使い魔…対するは三人の優秀な魔導師にさらには武装局員までもいる。戦力差は歴然だ。自滅を待たずとも可能なのだ。

（考える……母さんを…艦長を納得させられる方法を…）

クロノは考えた。急いで、なのはが勝手な行動をする前に。

（…そうだ！）

クロノは意を決してリンディに話し掛けた。

「艦長、僕は彼女に賛成です」

「クロノ？」

リンディが振り向きクレアも目を丸くする。

「無理に自滅を待つ必要は有りませんよ」

賭けに近い。だがやるしかない。
虚勢とはいえ自信に満ちた声で話し出した。

EP・9 嵐の日（後書き）

今回ばかりはリンディの行動は良いとは思いきれませんでした
問題視されている部分もできるだけ考えたのですが、考えれば考えるほど、逆に新たな問題ができてしまつて…

EP・i0 対するは六つの魔石（前書き）

これで良いのか少し疑問でした

EP・10 対するは六つの魔石

「無理に自滅を待つ必要はありませんよ」

正直言つて部の悪い賭けだ。話術で勝つ事はまず不可能。しかし打ち負かす訳では無い、説得できれば良いだけだ。

「彼女達を捕獲するのは現時点でも容易です。向こうは疲弊した魔導師とその使い魔、刃と同レベルの騎士のみ…」

「同レベルだと!?!」

刃が然も不満げに言う。

「いや、いつつも互角っぽかったじゃないか」

「ぐ…」

ユーノのツツコミに反論できずに黙る。

「いいえ、この映像を見る限り、刃より技量は上よ」

「むぐ!?!」

さらにクレアの追い撃ちにがつくりとうなだれる。

実際、刃がカレルと互角なのは能力によるごり押しによるものだ。特に切り合いでは完全に弄ばれている。

「…対するこちらは、ニアSランクにAAAランク…火力だけなら

僕らを上回る二人に結界魔導師。戦力差は歴然です」

「だとしても、あのような危険空域に民間人を向かわせる訳にはいかないわ。それにあの場所に転送するのも危険よ」

現在フェイト達がいる場所は膨大な魔力が渦巻いている。転送させた瞬間に嵐に飲まれてしまう危険性すらあるのだ。

「あの、だったらもつと上空に転送すれば！」

ユーノが手を上げて意見する。

よくよく考えると、原作でなのはを転送させたのはユーノだ。そしてなのはは遥か上空に転送され、セットアップしてからフェイトのもとへ行ったのだ。つまり出鱈目に転送させたのではなく、態勢を整え、十分な準備をする時間を考えて転送させた事がわかる。

「それに悔しいですが、彼女達の力が必要です」

「クロノ特別捜査官、あなたは民間人をあんな危険空域に行かせる気！？」

リンディにもわかつてはいた。だが、彼女はなのは達だけでなく、アースラの乗組員全員の命を預かる立場にある。安全かつ確実に任務をこなすのが最優先なのだから。

「だからこそ僕が行くんです！」

「あなたの實力はわかっているけど、一人で三人の安全を確保しつつ六個のジュエルシードを封印、さらに彼女達の逮捕をやれると思っているの？自惚れるのいいかげんにしなさい！」

「やってみせます！艦長、許可を！」

なおもクロノは食いつく。たしかに困難だ。原作では無事に封印できたが、転生者の存在などで何が起きるかはわからない。だがこのままにはできない。

「……艦長」

黙って聞いていたクレアが口を開く。

「たしかに一人では困難ですが、二人でならば可能性は格段に上がります」

「あなたまで……」

リンディは飽きたように額を押さえる。

「その上、【事情徴収ができない状態】になってからでは遅いかとそれに……」

なのはに視線を送り、再びリンディの方へ振り向く。

「私には不可能には思えません」

自信に満ちた笑顔で言った。

負ける気がしないとはこの事だろう。自分達ならできる、そんな気がした。

「……………失敗は許されないのよ？」

「勿論」

「わかっています」

自信に満ちた顔。子供の我が儘にも見えるが、それだけでない何かがあった。

この子達に賭けてみても良い。そんな気がする程に。

「ハア……わかったわ。クレア執務官、クロノ特別捜査官にジュエルシード回収と搜索者の逮捕を命じます。民間協力者三名の同行も許可します」

ついに出撃を許可した。その事なのはとユーノは顔を見合わせ喜ぶ。

「さあ、行くよ」

「時間もあんまり無いし急ぎましょ」

クロノとクレアが転送ポートに走り出す。

「ありがとう！クロノ君、クレアちゃん！行こうユーノ君」

「うん！ほら、刃も」

なのはも続き、ユーノが走り出す。

「フン。足を引っ張るなよ」

今回は仕方ない。モタモタしていた自分が悪いのだ。原作は長いの

だ、いくらでも時間はある。

刃はまだ自信があった。自分が主人公であると。しかし彼は気付いていなかった。なのはが自分呼んでなかった事を。

カレルは顔を隠していたマフラーがずれても直す余裕が無いほど追い詰められていた。

（くそっ！まだ来ないのか？）

カレルは焦っていた。フェイトも限界が近い上、自分とアルフも危険だ。

まさか本当に力尽きるのを待っているのだろうか？いや、なのはは来るはずだ。刃だってフェイトを見捨てるはずがない。

（まさか、俺が力尽きるのを待っているのか？）

ありえる。だが、どう見てもフェイトの方が先だ。

不安は募るばかり。だが、それは杞憂となった。はるか上空から一人の少女が現れたのである。白い衣装に胸の赤いリボン。高町なのはだ。

「フェイトの……邪魔を、するなあああ！！」

アルフが自らに纏わり付く雷を食いちぎり襲い掛かる。彼女にとってなのはは敵でしかなかった。

いまにも飛び掛かりその牙で噛み付こうとしたが、緑の光りに阻ま

れる。

「違う、僕達は君達と戦いに来たんじゃない！」

さらにクロノ、クレア、刃も現れる。

「今はジュエルシードの封印が最優先！あなたも手伝って！」

「ユーノ！」

クロノの呼びかけにユーノは頷き、アルフから離れチェーンバインドを放つ。緑の鎖は竜巻を捕らえ、アルフに伸びた雷を押さえる。

「フェイトちゃん！手伝って！ジュエルシードを止めよう！」

なのははフェイトの側に行き、レイジングハートをバルディッシュに近づける。すると桜色の光りがバルディッシュに注ぎ込まれ、魔力供給がされる。

『Power charge.』

『Supplying complete.』

バルディッシュから金色の魔力刃が伸び、再び輝きを取り戻す。

「二人できつちら半分こ」

フェイトは敵である自分に力を分け与えるのはに戸惑いを隠せなかった。

一方カレルもクロノに支えられ態勢を立て直す。

「君は大丈夫か？」

「フェイトほどじゃない。心配はいらねえよ」

少々乱暴な口調だが敵意は感じられなかった。

「なら良い。今はこれを止めるぞ」

「協力しろってか。上等！」

ゼファーを握りしめフェイトの下へ飛び出す。

アルフもユーノと共にチェインバインドを竜巻に向け抑え出した。

「各員、二人が抑えている間に一斉砲撃！力技だけど、これが一番
確実よ！」

クレアの指示に頷くクロノとなのは。そんな中、戸惑うフェイトに
カレルが寄る。

「フェイト、今はつべこべ言ってる場合じゃない。とりあえず協力
するぞ。バルディッシュ」

『Sealing form set up.』

カレルが促すとバルディッシュは姿を変えた。カレルの言う事が正
しいと判断したからであろう。

「バルディッシュ……うん」

意を決してバルディツシュを構え、足元に金色の魔法陣を展開する。周囲では全員が魔法陣を展開し、己の相棒にその力を込め出した。

「つてー！！！」

クレアの合図と同時に、全員が力の限り叫びその全力の一撃を撃ち込む。

閃光が辺りを覆い尽くす。

その一撃は六個のジュエルシードを封印するには十分すぎるほどの力を有していた。光りが収まると眼下には六個のジュエルシードがうつすらと輝きながら浮かんでいた。先程の嵐の正体とは思えないほど、あまりにも幻想的な光景だった。

なのははようやくわかった。フェイトに何を言いたいのか、彼女とどうなりたいのか。今なら言える。伝えたい、自分の気持ちを…

「友達に…なりたいんだ」

ただ一言。自分の素直な気持ちだった。

当然刃もチャンスと近づこうとするが、空気読めといった様子でユーノとクレアに取り押さえられていた。クレアはフェイトが投降してくれる切っ掛けになると考えていたし、ユーノはなのはの邪魔をさせたくなかった。

「すまないが、投降してくれないか？こちらが悪いようにはしない」

クロノはカレルとアルフに投降を呼びかける。この場でフェイトを捕らえれば早い段階でプレシアを発見、逮捕ができるかもしれないからだ。クロノとしても、虚数空間に消えてしまうのは避けたい。

「……」

アルフは悩んでいた。自分の主人はフェイトであり、勝手に投降する事などできない。それに管理局に捕まる事がフェイトの為になるかわからないから。

カレルも同じだ。自分だけが捕まっても二人の迷惑になるだけ。本当に今捕らえられる事が良いのかわからなかった。

そんな一時はすぐに崩れ去った。

『次元干渉！？別次元から、本艦及び戦闘区域にて魔力攻撃来ます！あ、後六秒！』

「！?!?」

突然のエドワードからの通信。それと同時に空が雲に被われ、紫の雷が鳴り響く。

「か、母さん…?」

フェイトにはわかっていた。この魔法を使っている人物を。しかしその表情は、母親から手を差し延べられた安堵より怯えるようなものだ。

「……!」

原作を知るカレルと刃は飛び出した。純粹に彼女を守りたい、彼女の気を引く為とそれぞれの思いは違えど、フェイトを迫り来る雷から守るために駆け出した。

「フェイトオオオ!!」

先に到達したのはカレルだった。刃はクレアとユーノを振りほどく事で、一步遅れてしまったのだ。

彼はフェイトの手を引きその場から離脱する。その瞬間、フェイトのいた場所に落雷が通りすぎた。間一髪である。

雷はフェイトだけでなく、クロノ達にまで襲い掛かる。クロノはなのはを、クレアはユーノを守るようにシールドを張る。刃はフェイトを助けられなかった事に苛立っていたが、自分の身を守らなければならぬので、仕方なくその場から離れた。

その隙を狙いアルフが飛び出し、ジュエルシールドに手を伸ばす。

「させない!」

クレアが間に割り込み、S2Uに阻まれる。

アルフの顔が見る見る怒りに染まる。あの女…プレシアの介入が意味する事、ここでしくじればフェイトに何をするかわからない。

「邪魔を…するなあああ!」

力の限り突き飛ばす。

「キヤアアア!?!」

「姉さん!」

突き飛ばされたが、海面で体制を立て直す。アルフは一安心とばかりにジュエルシールドに視線を移す。しかし…

「っ!?!三つしかない?」

まさかと思い、先程自分が突き飛ばした魔導師の少女を見る。彼女の左手の指の間には三つのジュエルシードがあった。

クレアはS2Uの先端を展開させ、ジュエルシードをしまう。

「くうう！」

悔しさや怒りが入り混じった表情で唸る。

なんという失態。自分の不甲斐なさに頭が真っ白になる。

「アルフ！」

フェイトがカレルと共に飛んでくる。

「逃がさない」

後方にはクロノが、下からはクレアが杖を突き付ける。しかし。

「悪いな！」

『Explosion』

カートリッジをロードしゼファアを回転させた。

「待って！」

二度も逃げられてたまるかと、クレアはスティンガーを放つ。しかしカレルは竜巻を起こしスティンガーを弾き、それは海水を吸い上げカレル達を包んでしまった。

「水なら！」

『Frost Cannon.』

クロノはフロストキャノンを撃ちこみ竜巻を凍結させる。

「とどめ！」

『Blaze Cannon.』

続けてクレアがブレイズキャノンを放ち凍り付いた竜巻を破壊する。
だがそこには誰もいなかった。

「……！！！」

「もう転移したのか。全く……本当に優秀な使い魔だな……」

クロノはアルフの能力に驚き、クレアはまたしても逃げられた事に
いらつきを隠せないでいた。

（しかしカレルはどうするんだ？この後はアルフが見つかるはずだ
が……）

彼はプレシアとどう戦うのか、はたまた説得を試みるのか。場合に
よっては今後の展開に大きく影響する。

（そろそろ大詰めだな。……いかん、緊張してきた）

失敗すれば大惨事だ。気を抜けはしない。
クロノは雷雲が晴れた空を見詰めていた。

EP・10 対するは六つの魔石（後書き）

プレシアがフェイトをどう思っているかで話しがかなり変わるな……

あと私は「アリシアを生き返らせてやるからフェイトを娘として見る」といった事を言うのが一番嫌いです

フェイトはおまけじゃありません

EP・11 思いを胸に（前書き）

昨日、A・S 最終決戦のTVとDVD比較動画を見ました

シャルの一部の増量っぷりが最高です

EP・11 思いを胸に

「ジュエルシードを三つ奪われて、さらに逃げられたと……」

「面目ありません……」

「私事です……」

クロノとクレアはアースラに戻った後、リンディに報告に来たのだが……結果は芳しくない。ジュエルシードも全て回収できず、逮捕も失敗。任務失敗と言っても間違いでは無い。

「……まあ、全員無事だったし、結果としていくつか得る事がありました。よって今回の事は嚴重注意のみと致します」

「「え？」」

二人はあまりの処罰の軽さに唖然とする。半ば強行的に出撃し任務も失敗。本来なら減俸ものだ。

「今は事態の收拾が最優先。ですからこの件はもう終わりです」

余計な事を言ってる暇があれば仕事しろ、結果を出せ。そんな意味もあつたのだろう。リンディは反論を許さなかった。

「さて、問題はここからね。クロノ、事件の大元について心当たりがあるようだけど？」

「はい。エドワード、モニターを」

「あいよ」

すると机の中心にいくつものモニターが現れ、その一つに一人の女性映し出された。

「あら！」

リンディはこの女性に心当たりがあるようだ。

「はい、僕らと同じミッドチルダ出身の魔導士、プレシア・テストロッサ。専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導士でありながら、違法研究と事故によって放逐された魔導士です。登録データとさっきの攻撃の魔力波動も一致しています。フェイトはおそらく……」

そんなクロノの言葉に思い当たる節があったのだろう。なのははある事を思い出した。

「そういえばフェイトちゃんあの時母さんって……」

彼女は聞き逃していなかった。フェイトの怯えるような声を。

「親子……ね」

同じ姓、そしてフェイト自身から告げられた【母】という言葉。想像は容易である。

「ですが、それだと彼が何者なのかがわかりませんね」

クレアがカレルの映像を出す。マフラーがずれ素顔があらわになっていた。

「……あれ？」

なのははその映像をじっと見詰めると、何かに気付いたようだ。

「この子…カレル君、どこかで見たような……」

「……え？」「……」

「何い！？」

以外な出来事に全員驚く。

「どこだ！誰なんだなのは！」

刃は必死だ。彼女に手を出したのではないかといらぬ疑いがあった。

「えっと………ごめん、よく覚えてないや。クラスメートとかだつたらわかるんだけど……」

特に親しくなくてもクラスメートならばすぐに気付く。だが知らない……けど何か引っかけがある。

クロノはハツとする。彼は転生者だろう。ならば……

「もしかして同じ学校の子なんじゃないかな？他のクラスなら見た事はあるかもしれない」

「あ！そうかも！」

「よし。僕は彼の事を少し調べて来ます」

所属がわかれば調べるのは簡単。海鳴の住人である可能性も高い。

「お願いね。エドワード、プレシア女史についてももう少し詳しいデータ出せる？放逐後の足取り、家族関係、その他何でも！」

「了解。すぐ調べます」

リンディはなのは達に振り向く。

「とりあえず、一旦三人は休憩を取ってもらっていいわ。ただ、データが出次第、また呼び出すからそのつもりはしておいてね」

「わかりました」

「仕方ないか…」

それからしばらくし、またしてもなのは達は会議室に呼ばれた。

「…プレシア・テストロッサ。ミッドの歴史で二十六年前は、中央技術開発局の第三局長でしたが…当時彼女が個人で開発していた、次元航行エネルギー駆動炉【ヒュードラ】使用の際、違法な材料で実験を行い失敗…結果的に中規模次元震を起こした事が原因で、中央を追われ地方へと異動になりました」

エドワードは先程調べた事を報告し出した。内容も重苦しいだけあって、眉間にしわを寄せ、いつもの明るい雰囲気は無い。

「随分揉めたみたいです…失敗は結果に過ぎず、実験材料にも違法性は無かったと、辺境に異動後も、数年間は技術開発に携わっていました。しばらくの後行方不明になって、それっきりですね」

「家族と、行方不明になるまでの行動は？」

フェイトについての情報であろう。彼女を見れば、フェイトが生まれたのは行方不明になってから。父親である人物などから、何かわからないかと考えたのだ。

「その辺のデータは綺麗サッパリ抹消されてます。今、本局に問い合わせ調べてもらっているので…」

「時間はどれくらい？」

「一両日中には、と」

エドワードの報告に一息入れ、次はクロノの方を向いた。

「…で、そっちはどうかしら？」

「大当りですよ」

モニターにカレルの写真が映し出される。その姿は騎士甲冑ではなく、なのは達と同じ聖祥の制服姿だった。

「本名、カレル・小川。年齢はなのは達と同じ九歳。クラスは違いますが、二人と同じ学校の生徒です」

「やっぱり……」

クロノとなのはの予想は大当たりだった。

「父親は現地…地球の方ですが、母親は元聖王教会所属の騎士でした」

「成る程。ご家族と連絡は？」

「確認した所、十日前に手紙を残して家出……現地の警察にも捜索願いが出てます」

管理局の介入と同時にフェイトの拠点であるマンションに行方をくらましたのだ。

「両親からは【遠慮はいらないので、馬鹿な事を仕出かす前に捕まえてください】…との事です」

「仕方ねえな。俺がきついお仕置きを……」

「誰も刃君に頼んでないよ。だからお留守番してて」

冷やかなツツコミ。半ば飽きたような口調である。

「うぐ……」

「……と言つ訳です。フェイトはユーノのように、偶然彼と出会い

現地協力者となってもらったのでしょうか」

「そうね…」

リンディは顎に手を当て少し考える。

「…プレシア女史もフェイトさんも、あれだけの魔力を放出した直後では早々動きは取れないでしょう。その間にアースラのシールド強化もしないといけないし…あなた達は、一休みしておいたほうがいいわね」

何か思い付いたように立ち上がる。

「あ、でも…」

「特になのはさん達、あまり長く学校を休みっぱなしでもよくないでしょう。一時、帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せておいたほうがいいわ」

「……はい」

「それもそうだな」

家族も心配するだろう。説明と言つ言い訳の為にリンディも同行する事になった。

ここは時の庭園。薄暗く魔女の館を思わせるような不気味さが漂っている。

そこにある巨大な扉の前にカレルとフェイト、アルフはいた。

「カレル、私が行くから別に…」

「いや、俺も行くよ。俺が足引っ張っちまったのもあるしさ」

「だけどさ…」

フェイトは心配だった。母が彼に何かするのではと。

アルフもカレルがフェイトの身代わりになろうとしているのがわかってはいたが、いくらなんでも彼を身代わりにするのは心が痛んだ。

「ほら、行こうぜ」

「……うん。アルフ、ここで待ってて」

「ああ…」

扉が開き二人は中に入って行った。

（二人共、無事でいてよ…）

アルフは座り込み、二人を待つ事にした。

一方、中に入ったカレル達を待ち構えていたのはこの主、プレシア・テストロッサだった。

腰までとどく髪、胸元の大きく開いた紫のドレスは深い色香を醸し出し、年を疑うような豊かな乳房と美貌を持つ美しい女性だった。

しかしそれらを台なしにするほど彼女の肌は青白く生気を失い、瞳は逆に異常なまでにギラつき狂気じみた恐ろしさが見える。

「……」

プレシアは蝙蝠の羽のようなものがついた杖に寄り掛かるようにゆらりと立ち上がる。その時カレルと視線が合った。

その瞬間、カレルの身体が固まる。魔法などではない、例えるならば【蛇に睨まれた蛙】といった状態である。命を狙われた事は今まで何度もある。しかしそれとは違う恐怖感があった。所詮今までの小物。そう、格が違いすぎるのだ。

（やばい、冷や汗が止まんねえ。なんだよこいつ、本当に病人かよ！？）

足が震えるなど、みつともない姿をさらさなかっただけでも御の字である。それ程彼女は桁違いの存在だった。

「あの……母さん……」

フェイトの言葉に意識を戻す。そう、彼女を守るために来たのだ、ビビっている場合ではない。

「今回の件で謝りに来た。俺が管理局を抑えられなかった所為で……」

「坊やに用は無いわ」

プレシアはカレルを無視しフェイトへと歩み寄る。

実際、偏にカレルの責任とは言えない。あの場でなのはの言葉に耳を傾けなければ、ジュエルシードの確保も可能だったかもしれない

のだ。

しかしカレルも無視されて黙ってはいない。ここに来た目的を、フ
ェイトに手を出させないためにも。

「カレル？」

カレルはフェイトとプレシアの間に割り込む。そしてプルシアをま
っすぐと見上げた。

「聞こえなかったのかしら？ 坊やに用は無いのよ」

「俺にはあるんだよ」

ただ一点。その目を見据えた。

「あんたに話しがな」

謝りに行く気なんてのはこじつけだ。フェイトの虐待を防ぐ事、そ
して彼女との対談が目的なのだ。

「……フェイト、この坊やをつまみ出しなさい」

「話しがあるつつてんだろ！」

フェイトが返事をするよりも早く叫ぶ。プレシアは僅かに目を細め
ると……

「……まあ良いわ。フェイト、少し出てなさい」

「え……」

対話に応じるようだがフェイトは不安であった。もしかしたらと思うと気が気でなかった。

「大丈夫。少し話しをするだけだ。すぐに終わる」

「……うん」

アルフと同じだ。自分の事を心配してくれている。だからこそ弱い自分が許せなかった。ただ祈るしか無い。本当に話しをするだけで終わる事を。

フェイトが出て行くとプレシアは椅子に腰を掛けた。

「で、何かしら？」

頼杖をしながら興味の無いように言い放つ。

実際彼女はカレルにはたいして興味を抱いていない。特別魔力が高いわけでも無い、レアスキルも無い、使うのも近代ベルカ式、アルフと同じようなフェイトの手助けをする程度の存在。ただそれだけである。

「なんでフェイトにあんな事をする？」

半ば怒気を孕んだ声。

「これは私達親子の問題よ。坊やの出る幕じゃないわ」

「だからと言ってもやり過ぎだろ！あんた、フェイトを何だと思ってるんだよ！」

カレルの怒気に全く動じず、プレシアは小さくため息をついた。

「フウ……最近の子供は礼儀知らずね」

「話をずらすな！俺はなんであんな事をするのか聞いてるんだ！」

のらりくらりとした態度に、フツフツと怒りが込み上げてくる。

「部外者に話す事はないわ。しかし随分と気に入っているようね。まあ、あの子見栄えは良いもの……」

プレシアはカレルとともに会話をする気が無かった。適当にあしらって消えてもらおう気でいた。

「それともフェイトが欲しいのかしら？良いわよ、全部終わったら好きにしても」

プレシアにとっては軽い冗談のつもりで言ったのだろう。しかしその一言で、カレルは完全にキレた。

「ふざけんなああああ！！！」

ゼファアを起動させ、無我夢中で突っ込んだ。

フェイトとアルフは扉の前で寄り添うように座っていた。

「大丈夫かな、カレル」

「…多分」

膝を抱かえ部屋に残った少年の身を按じていた。

本当なら自分も一緒にいるべきだろう。だけどカレルは一人残る事を望んだ。

（母さん、カレルに何かしないと良いんだけど…）

そう思い扉を見上げた瞬間、中から爆音が鳴り響いた。

「え？」

嫌な予感がした。すぐさま扉を開けて中に入る。

「カレル！？」

「あんだ…！」

そこにいたのは椅子に座り静かに視線をフェイトに向けるプレシアと、彼女の足元で全身から煙りを上げ倒れたカレルだった。

「カレル、しっかり！」

二人はカレルに駆け寄った。意識を失っているが幸い怪我はたいした事はないようだ。

「あんだ、カレルに何してんだよ！この子は関係無いだろ！」

「あら、坊やから仕掛けて来たのよ。私は返り討ちにしただけ…」

するとプレシアは立ち上がりフェイトの顔を掴む。

「駄目じゃない。こんな子を連れて来ちゃ」

「…はい」

アルフは今にも殴り掛かりたかった。おそらくカレルは自分と同じ気持ちだった。プレシアが許せず、攻撃を仕掛けたのだろう。

「全く…この坊やといい使い魔といい、駒を用意するのが下手ね」

「違う！」

珍しくフェイトが抗議した事に驚いた。

「カレルは友達…なんです。アルフも駒なんかじゃ……ない」

(……………友達…ねえ…)

フェイトの反論に驚きはしたが、すぐに何事もなかったように冷やかな視線をアルフに送る。

「すぐにそれを片付けなさい」

「なんであんたの命令なんか…！」

アルフは立ち上がろうとするがフェイトに制止される。

「アルフ、カレルを帰してあげて」

「帰すって…」

「やっぱり巻き込んだ私が悪いんだ。カレルに、今までありがとうって伝えといて」

「だけど…」

アルフはプレシアを見る。彼女は自分に出て行けと言っている。この後何をするかは容易に想像できる。

「お願い。これ以上迷惑を掛けたくないの」

どうにもできない。自分一人の力ではフェイトを助けられない。

アルフは狼の姿に変身し、カレルを背負いゼファアを銜えて走り出した。

（フェイト…）

悔しさから泣きそうになるのを堪えひたすら走る。

アルフは決意した。フェイトを止めるにはプレシアをどうにかしないといけない。半ばフェイトを裏切るような行為だが、彼女にはそれしか選択肢がなかった。

EP・11 思いを胸に（後書き）

よくプレシアとの対話ですぐアリシアの事を教えたりしますが、
実際どうなのでしょうか

こちらでは話さずに終わりましたが…

EP・12 狂気の母（前書き）

一気に飛ばします

EP・12 狂気の母

アルフはとある施設の前にいた。その大柄な狼の姿もあつてか非常に目立ち、施設に出入りする子供達の視線が集まる。

ここは私立聖祥大学付属小学校。カレルが通い、管理局についた少女…高町なのはが通う学校だ。

フェイトを止めるには管理局の力を借りるしか無い。それにカレルの手当てもだ。だからこそ彼女とコンタクトを取れるであろうこの学校の前に張り込んでいるのだ。

そして下校の時間。アルフは二つの臭いに顔を上げる。温かな臭いと腹が立つような嫌な臭い。なのはと刃だ。二人はアルフに気付かず、友人であろう二人の少女と話していた。

「…ちょっと」

二人はどこからともなく聞こえた念話にギョットとする。すぐさま周りを確認すると、橙色の大柄な狼が校門の近くに座っていた。

「あ…」

「あんだ…」

二人共アルフの存在に気付いた。

「…話があるんだ」

ここはアースラ。その一室にクレアとなのは達はいた。

「二人の話しと現場の状況、そして彼女の使い魔のアルフの証言と現状を見るに、嘘や矛盾は無いみたい」

アルフは管理局に投降し、カレルの手当てとフェイトの救助を求めたのだ。

「どうなるのかな…」

「プレシア・テストロッサを捕縛する。アースラを攻撃した事実だけでも、逮捕の理由にお釣りが来るわ。だから、艦長の命があり次第、任務をプレシアの逮捕に変更する事になるわね。あなた達はどうするの？」

答えはわかっていた。だが、改めて彼女の気持ちを聞きたかった。

「私は…私は、フェイトちゃんを助きたい！」

「ああ。俺が必ずな」

「こんな話を聞いて、黙ってなんかいられないよ」

思惑は違えど、フェイトを助きたい気持ちは同じだった。

「アルフさんの思いと私の意思。フェイトちゃんの悲しい顔は、なんだか私も悲しいの…だから助きたいの、悲しい事から！それに、友達になりたいって伝えたその返事、まだ聞いてないし」

「そうだな」

実際フェイトにとって、刃は眼中に無いのだが…

「わかった…こちらとしてもありがたいわ。フェイト・テストロッサについてはなのはに任せる…それで良いわね？」

隣にいるアルフに聞く。

「うん…なのは…だったっね…頼めた義理じゃないけど…だけど、お願い。フェイトを助けて」

アルフは縋るように身を乗り出す。その目は必死に訴えていた。フェイトを心配し、彼女を助けてほしいと。

「あの子、今本当に一人ぼっちなんだよ…」

俯き手を握りしめる。

「うん、大丈夫、任せて！」

なのはは笑顔でアルフの手を握った。

アースラの医務室。カレルは目を覚まし身体を起き上がらせる。その隣には一人の少年がいた。

「クロノ……」

「ああ、ゆつくりして良いよ。酷くないとはいえ怪我人だからね」
カレルを寝かし椅子に座る。

「アルフが連れて来たのか？」

「そうだ。君とフェイトを助ける事を条件に投降したんだ」

「そう……か」

そして目を隠すように腕を顔に載せる。少しカレルの身体が震え出した。

「畜生……！」

助けるために彼女と共にいた。しかしこのザマは何だ？助けられたのは自分ではないか。
言いようのない悔しさ、自分への怒りで悲しくなってくる。

「悔しいのはわかる。だがここで燻ってる場合じゃないだろ？まだ彼女を助けられる」

カレルはハッとしクロノを見る。

「君の力が必要だ」

「……俺は……」

差し延べられた手に戸惑うも、カレルはクロノの手を握った。

「フェイトを助けられるなら何だってする。俺もアルフも同じだ」

「ああ。頼む」

クロノはの微笑みに応えるように、カレルの瞳は強く燃え上がっていた。

それからほとんど拍子に事は進んだ。

なのははフェイトとジュエルシードを賭けた決闘を提案し、クレア達はそれを了承。翌日の朝にはフェイトもなのはの呼び掛けに現れ、二人の決闘が始まった。始終カレルと刃が睨み合っていたが、決闘は無事なのはの勝利に終わったのだった。

しかし簡単には終わらない。なのはは墜落したフェイトを支えた途端、再び空を雷雲が被った。

「フェイト！！！」

カレルは無我夢中に飛び出しフェイトに襲い掛かる紫雷を切り払った。

だがそうしている内にジュエルシードが輪を描きながら何処かへ飛んで行く。

「させるか！」

クロノがジュエルシールドに手を伸ばす。

ここで奪いに来るのは知っていた。だからこそ後に起きる次元震を軽くするために、プレシアにジュエルシールドを渡す訳にはいかなかったのだ。

「うおおおお！」

あと一本で手が届く。だが、標的をフェイトからクロノに変えた紫雷が降り注ぐ。

「ぐああああ!?!」

反応の遅れたクロノは、防御も回避もできず、その雷に撃ち落とされてしまった。

「クロノ！」

海に落ちる前にユーノがクロノを支える。

「大丈夫？」

「大丈夫だ。だけど…」

見上げるとジュエルシールドが雷雲の中に消えて行くのが見える。クロノは阻止できなかった事に、悔しそくに顔をしかめた。

クロノ達は一旦アースラに戻った。フェイトも着替えさせられ、手には手錠をかけられていた。

「お疲れ様。それから…フェイトさん、はじめまして」

ブリッジに案内されたフェイトにリンディは話しかけるが、フェイトは俯いたまま何も言わない。

「母親が逮捕される姿を見せるのは忍びないわ。なのはさん、彼女を別の部屋へ」

「はい…」

「フェイトちゃん、よかったら私の部屋…」

なのははフェイトを連れて行こうとしたが、彼女は動こうとしない。

『総員、玉座の間に侵入』

モニターには武装局員達がプレシアがいる玉座の間に突入しているのが見える。

彼らは椅子にふてぶてしく座るプレシアを囲みデバイスを突き付ける。

『プレシア・テストロッサ！時空管理局法違反、及び管理局艦船への攻撃の容疑で、貴女を逮捕します』

『武装を解除して、こちらへ』

彼女は余裕の表情を崩さない。プレシアにとって、人数がいようと
も彼らは恐るに足らぬ存在なのだ。しかし何人かが隣の部屋へと入
った瞬間、見る見る顔色を変える。

そこは変わった通路だった。中は薄暗く、柱や壁には青々とした蔦
が巻きつき、より一層不気味な雰囲気を出している。その薄暗い通
路の先、行く手を阻むように円柱状のポッドがある。
その中であつたのは…

「え!？」

「うつ!？」

「……」

青白く光る液体の中には、なのは達よりも幼い裸の少女が膝を抱き
かかえるように浮かんでいる。

その長い金髪といい、フェイトと瓜二つだ。

『私のアリシアに…近寄らないで!』

プレシアが局員を後ろに投げつけ、庇うように割り込む。

『く……撃て!』

局員が隊列を組み、デバイスをプレシアに向けて砲撃を撃つが不可
視の壁に阻まれる。彼らの力ではそれを貫く事はできなかった。

『うるさいわ…』

「危ない、防いで!」

プレシアの前に紫の魔力が渦巻く。リンディは危険だと判断し指示を出す。それよりも早く局員に襲い掛かった。

ブリッジに局員達の悲鳴が鳴り響く。

そして力無く倒れ伏す局員達と、悍ましい声で高笑いするプレシアが映し出されていた。

「いけない！局員たちの送還を！」

「了解っ！」

エドワードがコンソールを叩いて局員たちをアースラに戻し始めた。

「……アリ…シア？」

フェイトはアリシアと呼ばれた自分に似た少女に困惑する。

彼女の心には言いようの無い恐れがあった。だが動けない。まるで身体が縛り付けられたように。

「座標固定0120、503！」

「固定、転送スタンバイ！」

一方、エドワード達は局員達の回収を急いでいる。

『もう駄目ね、時間が無いわ。たった九個のロストログアでアルハザードにたどり着けるかどうかはわからないけど…』

プレシアが愛おしげにポッドにしがみつきながら、ゆっくりと顔を後ろに向ける。フェイト達が見ているのを知っているかのように。

『でも、もういいわ…終わりにする。この子をなくしてから暗鬱な時間も…この子の身代わりの【人形】を娘扱いするのも』

人形…その言葉を聞いてフェイトが体をびくつかせる。

『聞いていて？貴女のことよ…フェイト。折角アリシアとの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない…私のお人形』

いたぶるように、心を隅から削るようにフェイトに向けて言う。

「……以前言ってた事故でね…プレシア・テストロッサは実の娘…アリシア・テストロッサを亡くしてるんだ。安全管理不慮で起きた…魔動炉の暴走事故…アリシアは、その事故に巻き込まれて…そして、彼女のその後行っていた研究は…使い魔を越えた…人造生命の生成。そして、死者蘇生の技術」

エドワードは言いづらいうように言葉を繋げる。

「フェイトという名前は、当時彼女の研究の開発コードなんだ…」

開発コード。全員に嫌な予感が走る。

『よく調べたわね。そうよ、その通り。だけど駄目ね。ちっともうまくいかなかった。作り物の命は所詮作り物…失ったものの代わりにはならないわ…アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。我儘も言ってたけど…私の言うことをとてもよく聞いてくれた。アリシアは、いつでも私に優しくかった』

「やめて…」

これ以上言わせてはいけない。だがなのはには懇願するしかなかった。プレシアは自分の手の届かない所にいる、止める事はできない。

『アリシアは、いつでも私に優しくかった。フェイト、やっぱり貴女はアリシアの偽者よ。折角あげたアリシアの記憶も、あなたじゃ駄目だった』

プレシアはポッドを撫でる。狂おしいほど愛おしげに。

「やめて、やめてよ」

『アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使うだけのお人形。だから貴女はもういらないわ。どこへなりと消えなさい！』

「お願い！もうやめて！」

皆、あまりの異常さに言葉を失う。

クロノも【原作】として知ってはいた。だがそれを差し置いても、彼女の言動は異常だ。何故自分のために尽くしたフェイトにこんな事ができるのか、こんな事を言う事ができるのか。

『ハハハ…いいこと教えてあげるわフェイト。貴女を造り出してからずっとね、私は貴女が……大嫌いだったのよ……！』

「……！」

フェイトはまるで糸の切れた人形のように力なく膝を着く。

「フェイトちゃん！」

なのははフェイトを支えるが、何を言えばわからない。ただ抱きしめる事しかできなかった。

「な、なんだこりゃ！？庭園の中で魔力反応、多数！」

「何が起こってるんだ！？」

時の庭園の各所では床から滲み出るように西洋の騎士を模した口ボットが現れる。どれも剣や斧で武装し、管理局を拒むように立ち塞がった。

「庭園敷地内に魔力反応、いずれもAクラスです！」

「その数六十…八十…まだ増えます！」

「…プレシア・テストロッサ！一体何をするつもり！？」

プレシアはアリシアの入ったポッドを浮かせ歩き出す。

『私たちは、旅立つの。忘れられた都……アルハザードへ！』

プレシアの周りに九個のジュエルシードが浮かび上がる。

「まさか！」

「なんて事を！」

『この力で…取り戻すのよ。私たちの…全てを！』

警報が鳴り響き赤いランプが点灯する。そして次元震は艦まで震えさせる。

「次元震です、中規模以上！」

「デイストーションシールドを！」

「ジュエルシード九個の発動！次元震、さらに強くなります！」

ブリッジは騒々しくなりクルーの報告とリンディの指示が飛び交う。

「いい加減に目を覚ませプレシア・テストロッサ！貴女の行いはただの逃避でしか無い！」

クロノは身を乗り出し訴えかける。

「娘の死から目を背け、現実を否定しているだけだ！大切な者を失ったのなら、それを受け入れ死者を弔い、生きる。それが残された者の使命だろ！」

プレシアが笑い声を止める。

「第一、本当にそれはアリシアのためなのか！？フェイトを傷つけ、こんな危険な次元震まで起こして……そんな手段で過去を取り戻せる訳がない！余計に悲しみを募らせるだけだ！」

プレシアは目を見開き、怒りともいえる形容しがたい形相をする。

「子供ね……逃避？残された者の使命？子供のあなたに何がわかる

の…。そんな青臭いもの、とつくに通りすぎてゐるわ！」

再び高笑いを始める。半ば自嘲じみた笑い声だ。

「クロノ。行くわよ」

「…はい」

「二人共、どこ行くの!？」

二人はドアを開け外に出ようとする。

「彼女を止める」

「ゲートを開けて!」

そしてブリッジから駆け出した。

赤く点灯する廊下をひたすら走る。すると反対側からなのは達が走って来た。

「クレアちゃん、クロノ君、何処へ？」

「現地へ向かう。元凶を叩かないと」

「私も行く!」

「僕も!」

「まっ、大船に乗った気でいな」

なのは達もプレシアを止めに行くらしい。

「……わかったわ」

クレアは少し考え口を開く。

「アルフはフェイトについてあげて」

「う…うん」

アルフは軽く頷く。

「カレル、君は？」

「…フェイトはアルフに任せる。俺も行く」

カレルの返事にクロノは頷き、刃の方を見る。

刃は小さく笑ったのだ。陰湿な笑みで。

そしてクロノは刃に気付かれぬよう後ろに回り込んだ。

「ふん。足手ま「当て身」ふべ!？」

鋭く手刀を叩き込み気絶させた。

「何やってるのクロノ!」

「えっと…刃、大丈夫？」

ユーノが気絶した刃を突く。

「刃が姉さんとはかく、僕の指示を聞くと思う?。」

「ありえないの」

「雷が降るね」

なのはとユーノは即答した。刃がクロノの指示を聞くなんて有り得ないのはわかりきっているからだ。

「勝手に行動されては困る。これは今まで以上に危険だからね」

「……まあ、そういう事なら後で片付けてもらいましょ」

クレアも刃を無視する事にした。

実際、刃は勝手に行動するのは明確だ。それにどさくさに紛れて、クロノとカレルを虚数空間に突き落とす可能性もあったからだ。ここで寝ていてもらうのが最も安全である。

「さあ、行こう!」

クロノは起動させたローランを握りしめ、走り出した。

EP・12 狂気の母（後書き）

多分あと二、三話位で無印は終わるかもしれませんが

EP・13 時の庭園（前書き）

劇場版の傀儡兵って、スパロボのオリジナル勢力に似そつなデザインだと思えます

EP・13 時の庭園

時の庭園入口。

クロノ達の目の前には大量の傀儡兵が待ち構えていた。剣や盾で武装した物、下半身が尾のようで羽を持つ物、それらより大きな斧を持つ物など、何種類もいるのがわかる。

「いっぱい居るね…」

その数に驚いたのか、ユーノは呟く。

「まだ入口よ。中にはもつと居るわ」

クレアが短く返答する。庭園内から多数の反応が確認されたのだ。ここの傀儡兵など、ほんの一部にすぎない。

「クレアちゃん、この子達って…」

フェイトのような命のある者ではないか。なのはにとって、最も不安な事だ。

「大丈夫。近くの相手を攻撃するだけの、ただの機械よ」

振り向かずクレアが答える。それを聞いて、なのはがホッとした様に髪が跳ねる。

「そっか、なら安心だ」

「遠慮はいらねえって事か」

なのはとカレルは構え、臨戦体制に入る。だがクレアがそれを右手で制止する。

「この程度の相手に、無駄玉は必要ないよ。クロノ、倒し損ねたのはお願い」

「残ってるかどうか怪しいけど…任せて」

弟の返事に小さく微笑むと、すぐに顔を引き締める。

「はっ！」

『Stinger Snipe』

S2Uの先端に光が集まる。それと同時に三体の傀儡兵が迫って来た。

「はっ！」

放たれた光弾は螺旋を描きながら傀儡兵を引き裂く。

「は、早い！」

続けて次々と傀儡兵を貫き、さらに空中で渦巻き魔力をチャージする。

「スナイプショット！」

キーワードと共に再び加速。残りの傀儡兵を一気に貫いた。しかし

最後尾にいた、銀色で一回り大きな傀儡兵を貫く事はできなかった。

「クロノ！」

「ハッ！」

クレアが指示を出した時にはすでにクロノは傀儡兵のすぐ傍にいた。ステインガースナイプに紛れ接近したのだ。

傀儡兵はクロノを叩き割ろうと巨大な斧を振り下ろす。クロノは難無く躲し頭上へと飛ぶ。

『I c i c l e B u l l e t .』

投げ付けるように、身の丈はありそうな一本の氷柱を撃つ。氷柱は傀儡兵の脳天を陥没させるように突き刺さり、傀儡兵は爆散した。

「「「……」」」

姉弟だからできるのであろう連携で、瞬く間に傀儡兵を全滅させた。三人はあまりの手際の良さに呆然とする。

「ボーっとしてないで！行くよ！」

「あ、うん！」

「すげえ……」

走り出すクレアの後を追いかけて、庭園内に駆け込む。

庭園内は所々壊れており、崩れた所では黒いもやがうごめいている。

その不気味さになのはとカレルは目を奪われる。

「その穴…黒い空間がある場所は気をつけて」

「虚数空間。あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間なんだ」

「飛行魔法もデリートする。もしも落ちたら、重力の底まで落下、二度と上がってこれないわよ！」

まさに奈落の底。例え飛べる魔導師であろうと飲み込む最悪の地。そこに落ちる事は死を意味する。

「き、気をつける」

「お、おう…」

もし落ちたら…そう思うと背筋が凍る程だ。

そして巨大な扉を蹴破ると広間に入る。しかしそこには門に居たのと同じ傀儡兵が、広間を埋めつくすように何体もいた。

「ここから二手に別れる。クロノ、三人を連れて最上階にある駆動炉の封印を！」

「了解！」

「クレアちゃんは？」

「プレシアの元に行く。それが私の仕事だからね。今道を作るから、そしたら！」

「でも！」

彼女一人で行かせるのが不安なのだろう。しかしクロノがなのはを制止する。

「大丈夫。姉さんは強い。だから心配はいらないよ」

「……うん！」

なのはは頷くとユーノを掴み、同じようにクロノはカレルを掴む。

『Blaze Cannon』

S2Uの先端に魔力が集中。そして一本の砲撃が傀儡兵を薙ぎ払う。それと同時にクロノとなのはは上に通じる階段を飛び、上って行く。

「姉さん、頼むよ！」

「クレアちゃん、気をつけてね！」

クレアは飛んで行くクロノ達に笑みを向けると、傀儡兵達を睨む。

「こんなので私を止められはしない」

残った傀儡兵はクレア目掛け走り出す。

「はあああああ！……！」

雄叫びと共にクレアも飛び出した。

一方クロノ達はアルフと合流。螺旋階段のような道を進んで行くが、絶え間無く襲撃してくる傀儡兵達に行く手を阻まれている。駆動炉を守るためか、戦力が集中しているのを危険視してか、傀儡兵はどんどん集まってくる。

飛び交う飛行型の傀儡兵をなのはが撃ち落とし、残りをアルフがその牙で引き裂く。

「くそつ、数が多い！」

カレルは取り囲もうとする金色の傀儡兵を、盾ごと切り裂き、続けて振り下ろした剣を避け胸を突き刺さす。

「どりゃあああ！」

駆け寄ってくる傀儡兵に投げ飛ばし、斬撃波を放つ。

「斬空牙ッ！」

『Y a a a a h a a a a a ! !』

投げ飛ばされた傀儡兵を真っ二つにし、その後ろにいる傀儡兵もまためて両断した。

「数だけだろ！」

クロノはアイシクルブレイドで切り伏せながら、アイシクルバレットを放つ。放たれた腕ほどの氷柱は傀儡兵の顔面を一撃で潰した。

「だが、時間をかけるのは得策じゃない！」

背後から襲い掛かる剣を躲し、アイシクルブレイドで首を切り落とす。

（かと言って下手な消耗は避けたいし…）

固まっている傀儡兵にローランを向ける。

『Diamond Dust』

氷弾の拡散弾が雨のように広がり、まとめて傀儡兵を破壊する。

（いや、焦るな。切り札は一度きりなんだから）

時間がかかれば次元震の危険は大きくなる。その事がクロノの精神を少しづつ削っていった。

「だけど、なんとかしないと…」

ユーノはチェインバインドで傀儡兵達を拘束している。傀儡兵は抜け出そうともがくが、その鎖から逃れる事はできなかった。

いや、一本のバインドがちぎれ、大型が脱出した。その傀儡兵は斧を振り上げ、背後からなのはに襲い掛かる。

「なのは！」

「っ!？」

ユーノの声に振り向くが、反応が遅れ回避も防御も間に合わない。
だが次の瞬間…

『Thunder rage.』

上空から鋭い雷が傀儡兵に降り注ぐ。

「あ…」

その閃光に一瞬目が眩むが、目を開け見上げると、そこには槍のよ
うにバルディッシュを構えたフェイトがいた。

『Get set.』

「サンダー……レイジ!」

先程より太く巨大な雷が傀儡兵を飲み込み、跡形も無く爆散した。

「フェイト…?」

フェイトはなのはの下まで降り、カレルも飛んで来た。

「フェイト、大丈夫なのか?」

「うん。大丈夫」

カレルもホツとするように胸を撫で下ろした。

だがそんな一時も与えないように壁が崩れ、そこから一体の傀儡兵が現れる。両手や背中に大砲を持つ銅色で大型の傀儡兵だ。

「大型だ。バリアが強い」

「うん。それにあの背中…」

そう言い終わる前に、今度は真横の壁を壊し、大型がもう一体現れる。

「もう一体かよ!？」

二体の傀儡兵は背中の大砲を向け、砲撃をチャージする。

「十字砲火だ。なのはとフェイトは一体目を。僕とカレルで二体目をやる!」

クロノがカレルの横でローランを構える。

「大丈夫、私達なら…!」

「…うん! うんうん!」

不安げなのはに、フェイトが勇気付けるように呼び掛ける。共に戦おう。その意味を読みとったなのは嬉しそうに頷く。

「カレル、僕がバリアを砕く! 君は本体を!」

「任せな!」

『Explosion.』

「いくよ、バルディッシュ」

『Get set.』

「こつちもだよ、レイジングハート」

『Stand by ready.』

クロノとカレル、なのはとフェイトがそれぞれ構え、はち切れそうなまでに収束した砲撃を撃つ前に己の一撃を叩き込む。

「全力だ！」

『Frost Cannon.』

クロノの放った冷気がバリアを凍り付かせる。ただの氷の膜となったバリアは、剥がれ落ちるように崩れる。

「牙突…風刃！」

続けてカレルが刺突の衝撃波を放つ。いや…衝撃波と言うより、無数の斬撃の固まりだ。

斬撃波は傀儡兵の胸に直撃、切り刻みながらその身体を掘り進むように貫く。

「サンダー…スマッシャー！」

一方ではフェイトが先行。その雷の砲撃はバリアに阻まれるが、そ

の衝撃で傀儡兵は体制を崩す。

「ディバイン…バスター！」

続けてなのにも砲撃を放つ。重なり合った砲撃はバリアごと傀儡兵を、そして庭園をも貫いた。庭園を揺らす程の衝撃が響く。

傀儡兵を全滅させたクロノ達はホッと一息つく。

「フェイト、フェイト…フェイト！」

「アルフ」

アルフがフェイトに駆け寄り抱き着く。

「心配かけてごめんね。ちゃんと自分で終わらせて、それから始めるよ……本当の自分を」

もう迷わない。決着を着ける。必ず。

「フェイト…」

「カレルもごめんね」

「良いさ。俺もたいした力になれなくて…」

フェイトは首を振る。

「ううん。カレルやアルフ、バルディッシュがいてくれたから、私

は立ち上がった。一人じゃないって教えてくれたから」

「あ、ああ。まあ…な」

カレルは照れ臭そうに頭を掻く。

「そろそろ良いかな？急いだ方が良い」

クロノの声に振り向く。

「こっち。案内するよ」

「助かる」

フェイトの後を追うように駆け出した。

傀儡兵は次々と襲い掛かるが、クロノ達は難無く撃退し進んで行く。そして一つの扉を破壊した。

「このエレベーターから、駆動炉に向かえる」

「うん、ありがとう！」

「感謝する」

駆動炉は目前。今だに周りには傀儡兵がいるが、数はだいぶ減って

いる。

「カレル、フェイトと一緒に行くんだ」

「え？」

不意にクロノが念話をする。

カレルもフェイトといた方が良く。そう思ったのだ。

「一緒に行きたいんだろ？止めはしないさ」

「……悪い」

するとユーノが焦るように走ってくる。

「今クレアが一人で向かっている。急がないと間に合わないかも！」

「フェイト！」

「うん。じゃあ……」

三人は下の階へと向かう。

「一応言っておくが、プレシアを助けようとして、君が虚数空間に落ちないようにね」

「……！？お前……」

クロノの言葉にギョッとする。

「詳しい事は後だ！」

「……っ！話し、聞かせてもらっぞー！」

考えるのは後。カレルはフェイト達とプレシアの下へと向かった。

エレベーターから一気に駆動炉まで到達した。しかし、そこには多数の傀儡兵が待ち構えていた。

「…さて、封印はなのはに任せる」

「クロノ君は？」

「僕はあいつらの相手をするよ」

『I c i c l e B l a d e .』

ローランの先端に氷の剣が形成され、クロノは二人の前に立つ。

「もし抜かれた場合、なのはの防御は…ユーノ、君に任せる」

「僕が？」

クロノは振り向き、ユーノの額を小突く。

「女の子を守る役をあげるんだ。しくじるんじゃないぞ、フェレッ

トもどき」

「誰がフェレットもどきだ!」

ユーノは怒ったように身を乗り出す。

「でも、いつも通りかも」

「え?」

振り向くとなのはが笑っていた。

「ユーノ君がいるから、私は全力で戦える。ね?」

「……!?!」

その微笑みにユーノは見る見る顔を赤くする。

「ああ、やってやる!なのはには指一本触れさせやしないよ!僕がやってやるさ!」

真剣な表情でなのはに宣言する。その言葉になのはは僅かに頬を染める。

(そう…始めは刃君が守ってくれてるって思ってた。けど違う…刃君は好き勝手に暴れていただけ。私の事を守ってくれてたのは、ユーノ君だった)

そう思うと、心も、背中も暖かくなる。力が湧いてくる。

『Sealing mode.』

なのはが封印の準備に入るのを確認し、クロノは傀儡兵達の前に立つ。

なのはどころか、ユーノの所に行って行かせるものか。その気迫は周囲を凍てつかせる程である。

数の差は圧倒的。だが、恐れは無い。

「さあ… かき氷になりたい奴から……」

床を踏み締め、ローランを構える。
傀儡兵達もクロノを標的に定めたようだ。

「かかって来い!!!」

EP・13 時の庭園（後書き）

次回、無双入ります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7276y/>

魔法姉弟ツインクロノ

2011年12月3日16時51分発行